

問題児たちとメカクシ団が異世界から来るそうですよ？【凍結】

守紙 軸

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

カゲロウデイズを攻略したメカクシ団に届いた一通の手紙。それは箱庭からの招待状だった！さらに赤いジャージを来たあいつは箱庭出身だった?!これは問題児たちとメカクシ団が箱庭で過ごすお話。

◆シンタロー、アザミがチートです ◆不定期投稿です ◆シンタロー×レテイシアです。 ◆拙い文章ですがぜひ読んでください！

目次

プロローグ 1・2	1
第1話	4
第2話	11
第3話	19
第4話	30
第5話	39
第6話	48
第7話	58
8話	68
第9話	76

プロローグ1・2

プロローグ

???視点

「本当に行つてしまうのか？」

「ああ。『あいつ』もあつちにいるしな。」

「そうか、寂しくなるな。」

「ふつ。そんな顔すんなつて、別に今生の別れになるわけじゃないんだしさ。」

「そうだが、恋人がいなくなつてしまうのは案外寂しいもんだぞ？」

「それは俺も同じなんだがな。さて、そろそろ時間かな」

「もうそんな時間かそれじゃあまた会いに来てくれよ？ 『シンタロー』？」

「分かつてるよ 『レティシア』。それじゃ。」ヒュンツ

???視点

「箱庭からでてどれくらいの間時間がたったかな？ 今や『あれ』は私の制御を離れて暴走してしまった。私は一体どこで間違えてしまったのだろうか、なあ兄さん？」

プロローグ2

カゲロウデイズ内

キド視点

俺達は今日やつとカゲロウデイズを攻略した。

しかし、ここである問題に直面した。それは俺達が一度『死んでいく』という事だ。本来なら生きている筈のない存在である俺達は元の世界に戻る事が出来ないとカゲロウデイズを起こした張本人のアザミに言われた

「済まない。本当は私もお主達を元の世界に返してやりたいのだが一度ならず二度も返してしまうと世界が崩壊する可能性があるから」の。

「そうか。それなら仕方が無いが問題なのが俺達のこれからについて

だな。「ふむ。それについては私も一緒に考えねばな。責任は私にあるのだから。」

「済まない。しかしこれからどうしたものか。」メカクシ団の皆と助け出した姉さんとヒヨリも考え出した。メカクシ団で一番頭のいいシンタローなら何かいい案は出してくれないかと思っていたが今シンタローはアザミと何か話しているのでダメだろう。しかし、やはりと
言うべきか何も思い浮かばないな。 パサッ

ん？なんだ？この手紙は？取り敢えず皆に知らせておこう。

「皆！ちよつとこれを見てくれ！」そう言つて俺は皆に謎の手紙を見せた。皆不思議そうな顔で見ているがアザミとシンタローの二人が何故か驚いた顔で見ているが何か知っているのか？「アザミ、シンタロー、お前達はこの手紙が何か知っているのか？」「いや、俺は知らないが何故カゲロウデイズ内に手紙があるのか疑問に思つてな。」「済まない。私も知らないな」「そうか。宛先はメカクシ団になっているな。読んで見るか。えつとなになに？」

『悩み多し異才を持つ少年少女に告げる。』

その才能を試す事を望むのならば、

己の家族を、友人を、財産を、世界の全てを捨て、

我らの 『箱庭』 に来られたし。』

「・・・どういう事だ？・・・?!」すると急に目の前が光に包まれていった。

シンタロー視点

ふう。やつとカゲロウデイズを攻略する事が出来たな。箱庭でも思つたがやつぱこれを攻略するのは苦労するな。さてと、「大丈夫か？アザミ？」

「ああ大丈夫だよ、兄さん。でも驚いたまさか兄さんがこつちに來ていたなんて。」「こつちに來たのは18年くらい前だな。すぐに見つけれるとは思っていなかったががまさか18年もかかるとは思わなかったな。いや、逆にたった18年で見つけられたと喜ぶべきかな？」「ふむ、まあそこは置いといて、兄さんは何の為に私を探していたんだ？まあなんとなくは分かっているがな。」「お前の想像通り『箱庭

“に連れ戻す為さ。”

「やはりの。しかし帰り方はあるのか？私は女王に頼むぐらいしか帰り方は知らないが。」

「箱庭を出る前に新しい『蛇』を造ってな、そいつの能力で帰れるんだ。」なるほどな。流石兄さんだな。「はは。だろ？まあ何度も使えないがな。まあ問題はどーやってあいつらと別れるかだがな。」箱庭に連れて行くっていう手もあるがあいつらじゃすぐに負けちゃうしな。それに『あいつ』の事もあるし「いつその事あやつらも一緒に箱庭に連れて行ったらどうだ？今は弱くてもギフトゲームを何回もやれば嫌でも強くなるだろ。」「いやーまあそれはいいんだが問題はあいつとの関係をあいつらに伝えないといけないんだよなあ。めんどくさいし恥ずかしい。」「あーそれはのーまあしようがないじゃないか兄さんの事を好いている者がおる時点でその事は伝えないといけないからのー。」「だよなー。エネにアヤノ、ヒヨリにマリーか。はあ、まあしようがないんだけどさー、めんどいな。」しかし伝えるとさういって言えばいいんだろ、そもそも箱庭の事をなんて言えばいいんだろ、うか、はあ。「皆！ちよつとこれを見てくれ！」ん？なんだ？つて、え?!ちよつ?!なんであの手紙がここに?!まさかカゲロウデイズを攻略した事によって功績が出来たからか?!俺が内心でそう考えていると「アザミ、シンタロー、お前達はこの手紙が何か知っているのか?」「いや、俺は知らないが何故カゲロウデイズ内に手紙があるのか疑問に思ってたな。」「済まない。私も知らないな」「そうか。宛先はメカクシ団になってるな。読んで見るか。えつとなになに?。」

『悩み多し異才を持つ少年少女に告げる。』

その才能を試す事を望むのならば、

己の家族を、友人を、財産を、世界の全てを捨て、

我らの “箱庭” に来られたし。』

「・・・どういう事だ?・・・?!」やっぱ箱庭からの手紙か。まあ元々連れて来ようと思ってたしいいか。さてあいつらは元気にしてるかな?その瞬間目の前が真っ白の光に染まった。

第1話

シンタロー視点

ふう、やつと箱庭に帰って来れたな。約18年ぶりの箱庭なんだが

：

「「「うわあああああああ?!」」」

「「「きやあああああああ?!」」」

何この状況?なんで落下してんの?!このままじゃあいつらやばいんじゃないか?てか何か三人ほど知らない人がいるがまあ問題ないだろ。あの三人も多分『恩恵《ギフト》』を持っているんだろうし。というか下に湖見えるから大丈夫か。お、もうそろそろ着くかな?

ボチャン。

・・・ふう。やつと着いた。流石に体力落ちてるな。他の奴らはどうか?ん?あれは

「全く、信じられないわ!まさか問答無用で引き摺り込んだ挙句、空に放り出すなんて…」

「右に同じだクソツタレ。場合によっちゃやその場でゲームオーバーだぜ、コレ。石の中の方がまだ親切だ。」

「え、いえ石の中じゃ動けないでしょ」

「俺は問題ない。」

「そう、身勝手ね。」

・・・あの二人は大丈夫か。他はどうだ?

「はあはあ、し、死ぬかと思っただぞ。」

「だ、団長さんの言う通りです。一体何なんですか。急に光ったと思っただら空に放り出されるなんて。」

「まあまあ、キサラギちゃん落ち着いて。ほらキドも。怖がるキドもかわいいゴハツ」

「ううう五月蠅いぞカノ!そそそそんなに怖がって何かないわ!」

あいつらも問題ないな。

「だ、大丈夫すかマリー」

「大丈夫だよ。ありがとセト。」

「いやいや家族つすからね！礼はいいつすよ！それとそこのお嬢さんこの三毛猫お嬢さんの猫つすよね？」

「あ……三毛猫……ありがと」

「にやーにやー（緑の兄ちゃんサンキューな！死ぬかと思つたわ！）」
「いえいえ、困つた時はお互い様ツスよ！そちの猫さんもイイツスよ！次は気を付けてくださいツス！」

「?!……あなた三毛猫の言葉分かるの？」

「はいツス！俺の能力『目を盗む』のおかげツス！」

「そうなんだ。……私の名前は春日部耀、あなたは？」

「俺ツスか？俺の名前は瀬戸幸助ツス！セトと読んでくださいツス！」

「ん……よろしく……そちのあなたは？」

「ふえっ?!わ、私はこ、小桜茉莉です。マ、マリーって呼んでください。」

「うん、よろしくマリー。私の事は耀って呼んで。」

「う、うん！よ、よろしく耀ちゃん！」　　「パアアア！」

（……可愛い）

「にやにやーにやー！（お嬢に友達が！今夜は赤飯やな！）」

「良かったスねマリー！新しい友達が出来て！」

「うん！そうだ！モモちゃんとお婆ちゃんに教えてくる！」

「了解ツス！気を付けるツスよー！」

「うん！」

あつちも大丈夫そうだな。というか流石セトコミュ力が高い。後はヒビヤとヒヨリ、榎本先輩と遙先輩とアヤノか。　　ブウン　　ドサツ　　ん？

「痛っ！アザミさん助けしてくれたのは有難いんだけどもう少し優しく降ろしてくれてもいいんじゃないの？」

「五月蠅いわよヒビヤ、濡れるよりはマシでしょ。あ、シンタローさん！大丈夫でしたか？」

「むっ、それは済まなかった。そこら辺の事は考えていなかったから。他の者は大丈夫だったか？」

「はい、大丈夫ですよ。助けられてありがとうございます。おかげで濡れずに済みました。」

「いやいや礼には及ばんよ。近くにいたお主らしか助けられなかったもんでのお出来たら全員助けたかったんじやが。」

「いやいや5人も助けてくれたんだからそれで十分だよ。サンキューなアザミ。ヒヨリも心配してくれてありがとな。俺は大丈夫だよ。・・・怖かったけど。」

「あははははは！流石ご主人！ビビリですね！あれぐらい楽しまないと！」

「あれを楽しめるお前の方がおかしいわ！なんで上空4000メートルぐらいの位置から落下するのが怖くねーんだよー！」

「だってご主人と違ってビビリじゃないですし。」

「うるせー！」はあ。やっぱこいつの相手をするのは疲れるな。

「貴音、口調がエネに戻ってるよ。」

「あ、遙。え、まじで？」

「うん。」

「あちやー、やっちゃったなー。」

「あははははは。」

「シntaxロー！大丈夫だったー？」

「うおっ！いきなり飛び付いて来るなアヤノ。びつくりするだろうが。ヒヨリにも言ったが別に大丈夫だよ。」

「えへへへへ。良かったー、シntaxローに何かあったら嫌だもん。」

「だもんってお前。はあ、まあ心配してくれてサンキューな。俺はこの通りピンピンしてるから。」

「良かったー。」ギユウウウウウ

「・・・アヤノ何故そんなに抱きつく？結構苦しいんだけど。てかヒヨリも何故参戦してきた？」

「・・・アヤノさんばっかりずるい。」

「二人共いい加減離れろ。まずはここにいる人達で話し合わないといけないからな。」

「えー」

「子供かっ!」

「違うよ!」「子供です。」

「そうだった。」

ふう。ようやく離れてくれた。ああ、早くあいつに会いたいな。

「此処……どこだろう?」

「さあな。ま、世界の果てっぽいものが見えたし何処その大亀の背中じゃねえか?」

「いや、流石にそれは違うだろ。」

「お?」「あ」しまった。つい、ツツコんでしまった。

「まあいいや。」いいのかよ。

「一つ確認したいんだが、お前たちにも変な手紙が来たのか?」

「そうだけど、お前」は止めて。私の名前は久遠飛鳥よ。そっちの猫を抱えている貴女は?」

「……春日部耀。以下同文」

「そう。よろしく、春日部さん。それでそっちの色取りどりの皆さんは?」

「俺はメカクシ団団長のキドだ。よろしく頼む。」

「メカクシ団No. 2のセトツス!よろしくツス!」

「メカクシ団No. 3のカツノです!よろしくねー!」

「[[「ウザイ」]]」

「ヒドツ?!」

「メツメカクシ団No. 4のマリーです。」

「メカクシ団No. 5の如月桃です!アイドルやってます!」

「?!あの伝説のアイドル、如月桃?!」

「へ?」

「凄い。本物だ。」

「えつと耀ちゃん?モモちゃんが伝説のアイドルってどういうこと?」

「活動期間がたった2年だけなのにありえないほどの売り上げと人気を誇ったアイドル如月桃。本人はある日を堺に急に出てこなくなっただけ数十年たった今でもかなりの数のファンがいるってこの前テ

レビでやってた。」

「へ、へえー。そ、そうなんだ。お、教えてくれてありがとね！」モモの奴も大変そうだな。

「次は私ね。メカクシ団No. 6の榎本貴音よ。よろしく。」

「次は俺か。メカクシ団No. 7の如月伸太郎だ。一応モモの兄だ。よろしく。」

「二兄妹なの（か）?!」

「お、おう。」

「似てないな。」「似てないわね。」「似てない。」

「よく言われるよ。」

「次は僕だね。メカクシ団No. 8の雨宮響也だよ。ま、よろしく。」

「僕はメカクシ団No. 9の九ノ瀬遥だよ。コノハって呼んでね。よろしく。」

「メカクシ団No. 10の朝日奈ヒヨリよ。よろしく。」

「メカクシ団No. 0の楯山文乃です。よろしくお願いします。」

「私の名はアザミ、そこにいるマリーの祖母だ。よろしく。」

「二祖母?!」

「貴女その見た目で結婚して子供を産んだの?!」

「ああそうだが、二人共もう死んでしまったがの。」

「あつご、ごめんなさい。」

「いやいや別にもう過ぎた事だしの。」

「なあ。あんたって何歳何だ？」

「ふむ。まあ多分6桁はいつておるだろうな。正確な歳は残念ながらわからないのだ。スマンの。」

「い、いやそんだけ分かれば十分だ。ありがとな。」

「貴女は人間じゃないならなんて種族なの？」

「メドゥーサじゃよ。」

「メドゥーサなの？でも私達は貴女の目を見ても石になってないよ？」

「それは能力を発動してないと私が普通のメドゥーサじゃないのが関係あるの。」

「普通のメドウーサ？」

「まあそこら辺はまた今度にな。話すと長くなるからの。」

「……分かった。」

「ま、まあ色々あったけどよろしくね。それで最後に野蛮で、凶暴そう
なその貴方は？」

「見たまんま野蛮で凶暴そうな逆廻十六夜です。粗野で凶悪で快樂主義の三拍子揃ったダメ人間なので、用法と用量を守った適切な態度で接してくれお嬢様方」

「そう。取扱説明書をくれたら考えてあげるわ、十六夜くん。」

「ヤハハハ。マジかよ。今度作つとくから覚悟しとけよ、お嬢様。」

この二人ってなんか仲いいな。初対面のハズなんだが。

「それにしても案内係かなんかはいないのか？呼び出したんならそれ
なりの対応をして欲しいもんだ。」

「ええ、そうね。まさか、呼び出したらそれで終わりなわけないと思
いたいんだけど。」

「本当。いるならいるで出てきて欲しい。」

あの三人絶対に分かって言ってるんだろうな。まあ、こんだけ気配
がダダ漏れだとあの三人には簡単にバレるだろうな。それにうさ耳
が見えてるし。あいつ何やってんだか。まあ、あの三人に任せますか
ね。

黒うさぎ視点

うう。誰もパニックにならないせいで出るタイミングがないじや
ないですか。ていうか何か沢山呼び出されましたね。四通しか手紙
は出してないはずなのに。まあ、一つは団体様に出したのであのカラ
フルな集団がそうでしょう。というかお二人ほど見たことのある顔
がいるのですがまあ似てるだけでしょう。あの二人がいるわけない
ですし。さて、いつ出ましようか。おや？なにやら話が終わったよう
ですね。出るなら今です！

「仕方が無い。ならそこに隠れてる奴に聞かか。」え？

「そうね。出てくるまで待とうかと思っていたのだけれど全然出てこ
ないもの。しょうがないわよね。」え？

「うん。出て来ないのが悪い。」え？

「おーい。そこに隠れてる奴、早く出てこないと酷い目にあうぞー。」
えええええ！

「い、今出ますううううう！」

「おい。お前出てくるのが遅いぞ。」

「そんな事言われましても最初皆さんがパニックになっていたら出て
いけたのですが誰もパニックにならずにそのまま自己紹介に入っ
てしまったので出るタイミングを失ってしまったのですよ。」

「そ、そうだったのか。それは済まなかったな。」

「いえいえキドさんが謝る必要はないのですよ。皆さんが落ちてくる
時に出ていけば済んだ話なのですから。」

「それで俺達がここにいる理由は説明してくれるんだな？」

「そうでした！私はその為にここに来たのでした！」

「YES！その為に私はここにいるのですから！」

「それじゃあ早速話してくれこの世界についてをな。」

第2話

キド視点

「それではいいですか、皆さん。定例文で言いますよ？言いますよ？さあ、言いますよ？」「くどいよおばさん。」「……すいませんっっておばさんとはなんですか！おばさんとは！」「いいから早くしろ。」はい。それでは言います。ようこそ、〃箱庭の世界〃へ！我々は皆さんにギフトを与えられた者達だけが参加できる【ギフトゲーム】への参加資格をプレゼンさせていたどうかと召喚いたしました！」

「ギフトゲーム？」

「そうです！既に気付いていらつしやるでしょうが、皆さんは皆、普通の人間ではありません！その特異な力は様々な修羅神仏から、悪魔から、精霊から、星から与えられた恩恵でございます。【ギフトゲーム】はその〃恩恵〃を用いて競い合う為のゲーム。そしてこの箱庭の世界は強大な力を持つギフト保持者がオモシロオカシク生活できる為に造られたステージなのでございますよ！」

なるほど、つまり俺達が持つてる能力の事をギフトといいこの世界には俺達のような能力を持った人達が沢山いるのか。そしてギフトを使ってそいつらと戦うと言う事か。ん？飛鳥が拳手したという事は何か質問するという事か。おそらく大事な事だろうから聞いた方が良さそうだな。

「まず初歩的な質問からしていい？貴女の言う〃我々〃とは貴女を含めた誰かなの？」

「YES！異世界から呼び出されたギフト保持者は箱庭で生活するにあたって、数多とある〃コミュニティ〃に必ず属していただきます♪」

「嫌だね」うおい?!即答か!

「属していただきます！そして【ギフトゲーム】の勝者はゲームの〃主催者〃が提示した賞品をゲットできるといってもシンプルな構造となっております。」ふむふむ。

「『主催者』っていうのは誰なんスか？」

おお、セトナイスだ。

「様々ですね。暇を持て余した修羅神仏が人を試すための試練と称して開催されるゲームもあれば、コミュニティの力を誇示するために独自開催するグループもごございます。特徴として、前者は自由参加が多いですが『主催者』が修羅神仏だけあつて凶悪かつ難解なものも多く、命の危険もあるでしょう。」なに?! そうなのか!

「しかし、見返りは大きいです。『主催者』次第ですが、新たな『恩恵』を手にすることも夢ではありません。」なるほど。それで強くなったりするのか。

「後者は参加のためにチップを用意する必要があります。参加者が敗退すればそれらはすべて『主催者』のコミュニティに寄贈されるシステムです。」ハイリスクハイリターンって奴か。

「後者は結構俗物ね。……チップには何を？」

「それも様々ですね。金品・土地・利権・名誉・人間……。そしてギフトを賭けあうことも可能です。新たな才能を他人から奪えばより高度なギフトゲームに挑まれる事も可能でしょう。ただし、ギフトを賭けた戦いに負ければ当然——ご自身の才能も失われるのであしからず。」

なるほど。俺の能力をチップにしてもいいがその時に負けてしまえば俺の能力は相手に取られてしまうという事か。……それはキツイな。

「そう。なら、最後にもう一つだけ質問させてもらってもいいかしら？」

「YES! 大丈夫なのですよ!」

「ゲームそのものはどうやったら始められるの？」

「コミュニティ同士のゲームを除けば、それぞれの期日内に登録してくればOKです! 商店街でも商店が小規模なゲームを開催しているのでよかったら参加していつてくださいな!」

ん? ってことは

「なあ、黒うさぎ。」

「なんででしょうか、キドさん？」

「【ギフトゲーム】っていうのは箱庭では所謂法律みたいなものと解釈すればいいのか？」

「ふふん？中々鋭いですね。しかし、それは八割正解で二割間違いですね。我々の世界でも強盗や窃盗は禁止ですし、金品による物々交換も可能です。ギフトを用いた犯罪なんかもつてのほか！そんな不逞な輩はことごとく処罰しますーが！しかし！【ギフトゲーム】の本質は全く逆！一方の勝者だけが全てを手にするシステムです！店頭に置かれてる商品も店側が提示したゲームをクリアすればタダで手にすることも可能だという事ですね。」

「そう。野蛮ね。」

「ごもつとも。しかし『主催者』は全て自己責任でゲームを開催しております。つまり奪われるのが嫌な腰抜けは初めからゲームに参加しなければいいだけの話でございます。」

な、中々に辛辣だな。まあ、その通りなんだけど。

あ、あの封書は、

「さて。皆さんの召喚を依頼した黒ウサギには箱庭の世界における全ての質問に答える義務があります。が、それらのすべてを語るには少々お時間がかかるでしょう。しかし、コミュニティの同士も皆さんの到着を首を長くして待っておりますゆえ、ここから先は我らのコミュニティでお話しさせていただきますが、よろしいですか？」

まあ、特に質問したい事もないし別にいいか。

「待てよ、まだ俺が質問してないだろ。」

ん？十六夜か。何を質問するんだ？

「あ、その後俺からも質問いいか？」

シンタロー？何か疑問でもあったのか？

「ん？別に俺は後でもいいぞ？」

「いや、ただ疑問に思っただけだから十六夜から先に言ってくれ。」

「分かった。」

「それで十六夜さん、一体どんな質問ですか？ルールですか？それとも、ゲームそのものについてですか？」

「そんなものはどうでもいい。腹の底からどうでもいいぜ、黒ウサギ。ここでオマエに向かつてルールを問いただしたところになにか変わるわけじゃねえんだ。世界のルールを変えようとするのは革命家の仕事であってプレイヤーの仕事じゃねえ。俺が聞きたいのは…… たった一つ、手紙に書いてあったことだけ、黒ウサギ。」

手紙に書いてあった事？

「この世界は……面白いか？」

そうか。この三人は俺達と違って家族とかがいたハズだ。でも手紙には

『家族を、友達を、財産を、世界の全てを捨てて箱庭に來い。』と書いてあった。つまり三人は文字通り前の世界の全てを捨てて箱庭に來たんだ。その分の見返りがなきや割に合わないからな。

「……YES! 【ギフトゲーム】は人を超えた者たちができる神魔の遊戯。箱庭の外界より格段に面白いと黒ウサギは保証致します!」
へえ。これからが楽しみだな。

「それでえーと、シンタロー、さんの質問はなんでしようか？」

そういやシンタローも何か質問すると言っていたな。

「ああ。これは俺達がお前のいるコミュニティに入るという前提で聞くことなんだが。」

ああなるほど。コミュニティについての質問か。流石シンタローだな。全く考えてなかった。

って！黒ウサギの汗がやばいな。なんかダメな事なのか？

「お前が所属しているコミュニティの現状はどうなっているんだ？」

「ああ、それか。それは俺も気になっていたんだ。どうして黒ウサギは俺達を呼び出したのかがな。」

「そ、それは皆さんに箱庭でオモシロオカシク過ごしてもらおうと思っ
ています。」

「黒ウサギ、お前は一体何を焦っているんだ？俺はただお前がいるコミュニティの現状についてを聞いてるだけだぞ？俺がアザミを探
す為に抜けた”後どうなったかをな。”

「うう。やっぱりですか。」

「「「「はあ?!」」」」」

「は?! えっ! ちよっ! シ、シントローお、お前箱庭出身だったのか?!
で、でもキサラギと兄妹じゃ」

「いや、モモが産まれる二年前に外界に着いたはいいが活動拠点が無くてな。欲しかったんだが戸籍が無かったし。だから適当な夫婦を選んで催眠をかけて息子という事にしたんだ。勿論姿は子供の姿に変えてな。」

「そ、そうだったのか。」

「でもさ、なんでシントローくんはアザミさんを探しに外界に行つたの? あ、もしかしてアザミさんの事が好きなnゴハツ!」

「修く也くたとえ冗談でも言っちゃいけない事があるんだよ。」ニ
コッ

「そうだよ、カノ。次そんな事言ったらどうなるか分かるよね?」ニ
コッ

「ダメですね、猫目さん。これは団長さんに猫目さんの秘蔵フォルダを送信しておかないと。」ニヤリ

「ちよっ?! エ、エネちゃんま、待ってそれだけはやめ「ダメですよ、カノさん。あなたはそれだけの事を言ったんですから。」って、ヒヨリちゃんまで?!」

あいつらの前でこんな事いうから。自業自得だな。それと、「なあエネ。後でその秘蔵フォルダっていうのを見せてくれないか?」ヒソヒソ

「了解です!」ヒソヒソ

カノの奴シバイとかないとな。

「それでなんでシントローさんはアザミさんを探しに行ったんスか?」

「ああ、そういや知らなかったんだっけ。俺とアザミは兄妹だからな。」

「え?! それじゃあシントローさんは人間じゃなくてメドゥーサなんスか?!」

「ああ。だから夏とか冬は嫌いなんだよ。」

「というかシントローがアザミの兄っていうならシントローの年齢は」

「6桁は軽く超えてるぞ。」

「やっぱりか！」

「ヤハハハハハハハハハ！お前ら面白れえな！」

「ええ。カノ君はご愁傷さまだけどね。」

「あれはカノの自業自得だと思う。」

全くだ。

「んで、黒ウサギ。結局、コミュニティはどうなっているんだ？ちゃんと全部言えよ？俺に嘘は効かないぞ？」

「うう。わかりましたよ。ちゃんと全部話しますよ。」

「おう。お前らもちやんと聞いとけよ。これから所属するかもしれないコミュニティなんだから。」

「「「はーい」」」

「それでは話しますよ。まずは皆さんの為に最初から話しますね。元々私達のコミュニティは箱庭の東区画最大手と言われるほどのコミュニティでした。」

「へえ。それは凄いわね。」

「はい。それもこれもシントローさんといった強者がいたからです。そして約15年前主力のシントローさんが箱庭を出て行かれました。それは特に問題ではなかったのです。事実その後の12年は特に問題という問題もありませんでしたし。強いて言うなら事務仕事の負担量が増えたくらいですかね？」

「あいつら。ハア。」

「別にシントローさんが悪いわけじゃないですよ。それはあの人達が・・・と脱線してしまいましたね。まあ12年程は大丈夫だったんですよ。しかし、三年前、私達はとあるゲームを挑まれ、そして、負けました。」

「負けたですって?!あなた達のコミュニティは東区画最大手と言われていたんじゃないの?!」

「はい。しかし負けてしまったのです。箱庭の天災と呼ばれる【魔王】

に。」

「マツマオウ?!なんだ、箱庭にはそんなステキネーミングで呼ばれる奴までいるのか?!」

「は、はい。しかし、十六夜さんが考えてる魔王とは少し違うと思います。」

「そうなのか?けど魔王なんて名乗るんだから強大で凶悪で、全力で叩き潰しても誰からも咎められるところのないような素敵に不敵にゲスイ奴なんだろう?」

いや、その言い方どうかと思うぞ?」

「ま、まあ……倒したら多方面から感謝される可能性はございます。倒せば条件次第では隷属させる事も可能ですし。」

「へえ?」

「魔王は“主催者権限”という箱庭における特権階級を持つ修羅神仏で、彼等にギフトゲームを挑まれたが最後、誰も断ることはできません。私達は“主催者権限”を持つ魔王のゲームに強制参加させられ、コミュニティは……コミュニティとして活動していく為に必要な全てを奪われてしまいました。」

「なるほど。だから異世界のギフト保持者を召喚したという訳か。」

「はい。魔王には名前も旗印も仲間も全て奪われてしまいました。さらに奪われなかった仲間もその魔王との戦いがトラウマになってしまい箱庭から出ていってしまい、結果残ったのは空き地だらけの廃墟と120人の子供だけとなりました。」

「そうか。」

「ならよ。新しく名前と旗印を作ったらダメなのか?」

「た、確かにそれは可能です。しかし、改名はコミュニティの完全崩壊を意味します。しかしそれでは駄目なのです!私達は何よりも……仲間達が帰ってくる場所を守りたいのですから!」

「黒ウサギ。」

「茨の道ではあります。けど私達は仲間が帰る場所を守りつつ、コミュニティを再建し……何時の日か、コミュニティの名と旗印を取り戻して掲げたいのです。その為には皆さんのような強大な力

を持つプレイヤーに頼るしかありません！お願いします、皆様どうかその力を我々のコミュニティに貸して頂けないでしょうか?! シンタローさんもまたコミュニティに戻って来てくれないでしょうか……?!」

「ふうん。誇りと仲間をねえ。」

誇りと仲間を取り戻す為か。俺の答えは出てるが他の皆は、まあそうだよな。

「黒ウサギ、俺達メカクシ団は黒ウサギのコミュニティに入ろう。お前の覚悟しかと受け取った。」

「キドさん！他の皆さんも！」

「黒ウサギ。俺は元々コミュニティに戻ろうと思ってたんだ。断る分けないだろ。またよろしくな、黒ウサギ。」

「シンタローさん！」

俺達は入る事にしたが他の三人はどうなんだろうな。

「いいぜ。俺も黒ウサギのコミュニティに入ろう。仲間と誇りを取り戻す為に戦うか。ハッ。ロマンがあるじゃねえか。」

「ええ、そうね。というわけでこれからよろしくね、黒ウサギ。」

「………よろしく。」

「にやーにやー（これからよろしくな、黒ウサギのねーちゃん。）」

「十六夜さん！飛鳥さん！耀さん！皆さんありがとうございます！」

ふう。これで一件落着か。そう、俺は気を抜いていたから気が付かなかった。その時シンタローの目が真っ赤に染まっていた事に。

第3話

ジン視点

「ジン〜ジン〜ジン！、黒ウサのお姉ちゃんまだ箱庭に戻ってこねえの〜?」

「もう二時間近く待ちぼうけで私疲れたー!」

「あははは・・・そうだね。皆は先に帰ってていいよ。僕は新しい仲間をここで待っているから。」

まあ、確かに二時間も立ちっぱなしじゃあ疲れちゃうもんね。

「じゃあ先に帰るぞ〜。ジンもリーダー大変だけど頑張つてな〜。」

「もう、帰っていいなら早く言つてよ!私の足なんてもう棒みたいよ!」

「お腹減つたー。ご飯先に食べていい?」

「うん。僕らの帰りが遅くなっても夜更かししたら駄目だよ?明日も仕事あるんだから。」

「「「「はい!」」」」」

やっぱり皆元気がいいなー。・・・それにしても、最近箱庭の外に作られた国が活発になってきたって聞いたけど、ペリベツト通りは“世界の果て”と向かい合っているからか閑散としているなあ・・・もしも外界から来た人達が使えない人達だったら・・・僕らも箱庭を捨てて外に移住するしかないのかな。

「ジン坊つちやーん!新しい方々を連れて来ましたよー!」

「あ、お帰り黒ウサギ。そちらの男性四人と女性九人が?」

「はいな、こちらの皆さんがー」

あれ?黒ウサギ、固まってどうしたんだろう?

「・・・・・・え、あれ?み、皆さんシンタローさんと十六夜さんは、ど、どこに?」

「ああ、十六夜くんなら“ちよつと世界の果てを見てくるぜ!”と言つて凄いい勢いで駆け出して行つたわ。」

「因みに兄さんは十六夜が連れて行つたぞ、強制的に。」

「ちよっ?!なんで皆さん止めてくれなかったんですか?!」

「お、俺達は止めようとしたんだが気が付いたらもう見えなくなっていて。」

「まゝ別にいんじゃない?シンタローくんならすぐに連れ帰って来るだろうし。」

「いや、多分兄さんはそのまま付いていくと思うぞ?」

「デスよねー。やっぱアザミさんもそう思いますか?」

「ああ。」

「な、なんでシンタローが付いていくと思うんだ?シンタローはビビリだし嫌がつて帰って来ると思うんだが……」

「ああ。キドさん達は知らなかったですもんね。シンタローさんは昔コミュニティのみんなから“知識バカ”と言われる程知識を求めたんです。自分が知らないものがあると一週間は飲まず食わずで研究する事もよくありましたし。今回興味を持ったのは多分十六夜さんか十六夜のギフトでしょうね。じゃないとシンタローさんが大人しく十六夜さんに連れてかれる理由がありませんし。」

「な、なるほど。そうだったのか。」

「シンタローにそんな一面があったなんてね。一年も一緒にいても気づかなかったわ。」

「いいじゃないですか。私なんて三年は一緒にいたのに気が付かなかったんですよ?」

「アヤノさん。それを言うなら私は十六年一緒にいても知らなかったんですよ?」

「まあまあ、皆落ち着いてくださいっス!シンタローさんの新しい一面を知れて良かったっていう事でいいじゃないスか!」

「それもそうね。」

「そうですね、貴音先輩。幸助もありがとね。」

「いえいえ、礼には及ばないっスよ!」

そのシンタローさんって人はこの人達に慕われているんだな……って、あ!

「た、大変です!“世界の果て”にはギフトゲームのため野放しにさ

れるる幻獣が！」

「幻獣？」

「は、はい。ギフトを持った獣を指す言葉で、特に『世界の果て』付近には強力なギフトを持ったものがあります。出くわせば最後、とても人間では太刀打ち出来ません！」

「あら、それは残念。もう彼らはゲームオーバー？」

「ゲーム参加前にゲームオーバー………斬新？」

「冗談を言ってる場合じゃありません！」

ど、どうしよう。ここでその二人が死んだら呼び出した僕の責任だ。

「まあ、兄さんは人間じゃないがな。」え？

「あ、そういえばそうだったわね。それじゃあゲームオーバーするのは十六夜くんだけかしら？」

「それはシンタローさんが十六夜さんを助けられないという前提でございませうか？」

「ええ。だってシンタローさんは『知識バカ』なのでしよう？だから幻獣と戦わせて力量を測ったりしてもおかしくないじゃない？」

「うっ。そ、そうですね。それでは私はチョット十六夜さんとシンタローさんを捕まえて来ますので。ジン坊っちゃん、皆さんのエスコート宜しく願います。」

「うん。分かったよ、黒ウサギ。そっちも気を付けてね。」

「はいーあ、それと皆さんにコミュニティの現状がバレてしまいました。」

「分かった………つてええ?!」

えー僕達のコミュニティが『ノーネーム』だとバレてしまった?!

「でも皆さんは私達のコミュニティに入ってくださいると言ってくれたので安心してください、ジン坊っちゃん。」

「そ、そっか。良かった。」

「はい。それでは一刻程で帰ってくるので皆さんは先に箱庭を『堪能』くださいませー! ドーン！」

「………箱庭のウサギはあんなに速く跳べるんだな。」

「はい。ウサギは箱庭の創始者の眷属ですから。力もそうですが、様々なギフトの他に特殊な権限を持ち合わせた貴種です。彼女なら余程の幻獣と出くわさない限り大丈夫だと思うのですが……。」
「黒ウサギも堪能くださいと言っていたし、御言葉に甘えて先に箱庭に入るとしましょう。エスコートは貴方がしてくださいさるのかしら？」
「え、あ、はい。コミュニティのリーダーをしているジンIIラツセルです。齢十一になったばかりの若輩ですがよろしくお願いします。皆さんの名前は？」

「久遠飛鳥よ。そこで猫を抱えているのが」

「春日部耀。こつちの色取りどりの集団が」

「キドだ。よろしく。」

「セトツス！よろしくツス！」

「カツノです。よつろしく。」

「マ、マリーです。よ、よろしくお願いします。」

「モモです！よろしくね、ジンくん！」

「タカネよ。エネと呼んで。」

「ヒビヤだよ。よろしく。」

「ハルカです。コノハって呼んでください。」

「ヒヨリよ。よろしくね。」

「アヤノと言います。よろしくね、ジンくん。」

「私の名前はアザミだ。よろしくの。」

「はい。こちらこそよろしくお願いします。」

「さ、それじゃあ箱庭に入りましょう。まずはそうね。軽い食事でもしながら話を聞かせてくれると嬉しいわ。」

ジン視点out

—箱庭二一〇五三八〇外門・内壁

キド視点

あれ？俺達は今箱庭の門をくぐって中に入ったよな？なら、なんで中から太陽が見えるんだ？

「にゃー！にゃにゃにゃにゃー！（お、お嬢！外から天幕の中に入った筈なのに、お天道様が見えとるで！）」

「……………本当だ。外から見たときは箱庭な内側なんて見えなかったのに。」

「箱庭を覆う天幕は内側に入ると不可視になるんですよ。そもそもあの天幕は太陽の光を直接受けられない種族の為に設置されていますから。」

「それはなんとも気になる話ね。この都市には吸血鬼でも住んでいるのかしら?」

「え、居ますけど。」

「いるのか?!絶対飛鳥だつて冗談で言ったのにそんな真面目に返したら……………」

「……………そう。」

「そりやあそうなるって!」

「あつちでは春日部と三毛猫が喋ってるし……………って、喋ってる?!まあそれもギフトだろう。」

「それで、オススメのお店はあるのかしら?」

「す、すいません。段取りは黒ウサギに任せていたもので……………よかつたらお好きな店を選んでください。」

「それはうれしいのだけれどもお金は大丈夫なの?」

「あ、はい。それぐらいなら大丈夫です。」

「そう。それならあそこにしましょう。」

あの『六本傷』の旗を掲げてる店か。

「いらつしやいませー。ご注文はどうしますか?」

頭に猫耳?!後ろにはしつぽも付いているだ?!人間じゃないのか? ?

「えーと、紅茶を八つと緑茶を六つ。それと軽食にコレとコレと」

「にゃー! (ネコマンマを!)」

「はいはい。ティーセットが十四にネコマンマですね。」

……………ん?今だれかネコマンマ頼んだか?だれもないとなるとやっぱり三毛猫が頼んだのか。ってこの店員猫の言葉がわかるのか?!

「三毛猫の言葉、分かるの?」

しいというのが一般です。箱庭の創始者の眷属に当たる黒ウサギでも、全ての種とコミュニケーションをとることはできないはずですし。」

「そう……春日部さんとセトくんは素敵な力があるのね。羨ましいわ。」

「そうでもないツスよ。俺はこの能力は嫌いツスからね。」

「え？なんで？相手の思考を読めるのはいい事じゃないの？」

「手に入れたばかりの頃は制御が出来なくて目に入る人全ての思考が頭の中に入って来たんスよ。」

「え！それって……」

「はいツス。怖かったツスね。まだその時は6歳か7歳の時だったんで余計に。それにこの能力のせいで周りから【化物】と呼ばれたりもしたツス。」

「ツ?!」

「その時にもしキドやカノ、姉ちゃんがいなかったら俺は多分精神崩壊してたと思うツス。だから三人には本当に感謝してるツス！」

「いや感謝してるのはお前だけじゃないぞ、セト。」

「そうだよ、僕達だって皆がいたから今があるんだから。だからそんな事言っちゃ駄目だよ？過去は過去。今は今だよ。」

「……カノが何かいい事言ってる?!」

「ねえその反応なんなの?!酷くない?!僕だってたまにはいい事いうよ?!」

「普段が普段なだけにな。」

「……うんうん。」

「もういい?!本気で泣くよ?!」

「勝手に泣いてて。」

「耀ちゃんまで?!僕に味方はいないの?!」

「……いない(ツス／よ／わ／です／わよ)。」「……」

「皆酷い!!」

「あ、あははははは。」

まあ、俺やセトがカノに感謝してる事は本当だからな。メカクシ団

を影ながら支えてくれてたのもこいつだし。

「おんやあ？誰かと思えば東区画最底辺コミュ〃名無しの権兵衛〃のリーダー、ジン君じゃないですか。今日はオモリ役の黒ウサギは一緒じゃないんですか？」

誰だ？

「僕らのコミュニティは〃ノーネーム〃です。〃フオレス・ガロ〃のガルドゥガスパー。」

「黙れ、この名無しめ。聞けば新しい人材を呼び寄せたらしいじゃないか。コミュニティの誇りである名と旗印を奪われておいてよくも未練がましくコミュニティを存続させるなどできたものだ―そう思わないかい、皆様。」

「なんだ、こいつ？勝手に話しかけて来たと思ったら空席に勝手に座って。常識がなってるいな。」

「失礼ですけど、同席を求めるならばまず氏名を名乗った後に一言添えるのが礼儀ではないかしら？」

「おっと失礼。私は箱庭上層に陣取るコミュニティ〃六百六十六の獣〃の傘下である「烏合の衆の」コミュニティのリーダーをしている、つてマテやゴラア!!誰が烏合の衆だ小僧オオ!!」

「「「「「「ブフォ!」」」」」」」

「ちよつ、ジンくんナイス。w w w」プルプル

「う、烏合の衆って虎のおじさん十一歳の子にどんだけ舐められてるのw w w」プルプル

「そんな事言うならヒビヤくんだって十一歳じゃんw w w」

「僕は精神年齢はそこら辺の子供とは違うのw w w」

「口を慎めや小僧共オ……紳士で通ってる俺にも聞き逃せねえ言葉はあるんだぜ……?」

「し、紳士だって。あんな簡単に怒ってるのに紳士だってw w w w w w」

「紳士ならそんな簡単には怒らないと思うよ、虎のおじさんw w w」
「あの二人は置いといて。それで結局貴方は何をしに来たのかしら?」

「飛鳥さん。あのエセ紳士の虎さんは俺達を自分のコミュニティに招待したいらしいツスよ。」

「ツ?!その緑の服を着たガキ。何故分かった?!」

「俺のギフトツス。」

「あら、そうだったの?でも無駄足ね。ここにいる私達は皆ジンくんのコミュニティで間に合ってますもの。」

「「「「「うんうん。「「「「」」」」」」」

「なんだと?!何故だ。?!何故名無しなんかのコミュニティがいいんだ?!」

「だって魔王から誇りと仲間なんて・・・カツコイイじゃない?」

「それに俺達はジンのコミュニティに入らないにしてもお前のコミュニティには絶対に入らないだろうしな。お前みたいなやつがコミュニティの仲間とかお断りだ。」

「さっすがキドゥ。カツコイイ〜。」「黙れ。」

はあ。このバカは。

「お・・・御言葉ですが皆さ【黙りなさい。】「ガチン！」

?!なんだ?!飛鳥か?飛鳥がやったのか?

「・・・・・・・・・・・・・・・・?!・・・・・・・・」

「私の話はまだ終わってないわ。貴方からはまだまだ聞き出さなければいけない事があるのだから。貴方は【そこに座って、私の質問に答え続けなさい。】」

これはガルドを操っている?!いや体の支配権を乗っ取った感じか?!

「お、お客さん!当店で揉め事は控えてください・・・」

「ちようどいいわ。猫の店員さんも第三者として聞いて行って欲しいの。多分、面白い事が聞けるはずよ。」

「俺はもう見たツスけどかなり胸糞悪い事ツスよ。」

「あらそう、なら余計聞いて行って欲しいわ。それじゃあ聞くわね。貴方のコミュニティはどうやってここまで大きくなったのかしら?私が聞いた話によるとコミュニティのゲームは「主催者」とそれに挑戦する者が様々なチップを賭けて行うものはず。・・・ねえ、ジ

ンくん。コミュニティそのものをチップにゲームすることは、そうそうある事なの？」

「や、やむを得ない状況なら稀に。しかし、これはコミュニティの存続を賭けたかなりレアケースです。」

「そうよね。訪れたばかりの私達でさえそれぐらい分かるもの。そのコミュニティ同士の戦いに強制力を持つからこそ“主催者権限”を持つ魔王は恐れられてはず。その特権を持たない貴方がどうして強制的にコミュニティを賭けあうような大勝負を続ける事ができたのかしら。【教えてくださる?】」

「き、強制させる方法は様々だ。一番簡単なのは、相手のコミュニティの女子供を攫って脅迫する事。これに動じない相手は後回しにして、徐々に他のコミュニティを取り込んだ後、ゲームに乗らざるを得ない状況に圧迫していった。」

「まあ、そんなところでしょう。貴方のような小者らしい堅実な手です。けどそんな違法で吸収した組織が貴方の下で従順に働いてくれるのかしら?」

「各コミュニティから、数人ずつ人質に取つてある。」

「……そう。ますます外道ね。それで、その子供達は何処に幽閉されているの?」

「もう殺した。」

な?!

「初めてガキ共を連れてきた日、泣き声が頭にきて思わず殺した。それ以降は自重しようと思っていたが、父が恋しい母が愛しいと泣くのでやっぱりイライラして殺した。それ以降、連れてきたガキは全部まとめてその日のうちに始末する事にした。けど身内のコミュニティの人間を殺せば組織に亀裂が入る。始末したガキの遺体は証拠が残らないように腹心の部下が食【黙れ】」ガチン!!

こいつ、ここまでのクズだなんて子供達を殺してよくもそんな平気でいられるな。ゲスが。

「素晴らしいわ。ここまで絵に描いたような外道とはそうそう出会えなくてよ。流石人外魔境の箱庭の世界といったところかしら?」

「飛鳥、ここまでのクズは箱庭でもそうはいないぞ。」

「あらそうなの？それはそれで残念ね。・・・所で、今の証言で箱庭の法がこの外道を裁く事はできるかしら？」

「正直な所、難しいな。吸収したコミュニティから人質をとったり、身内の仲間を殺すのは勿論違法だが・・・その前にこいつが箱庭の外に逃げ出してしまえばそれまでだ。」

「そう。なら仕方がないわ。」パチン

「・・・この小娘がアアアアア!! テメエ、どういうつもりか知らねえが、俺の上に誰が居るかわかってんだろうなア!? 箱庭第六六六外門を守る魔王が俺の後見人だぞ!! 俺に喧嘩を売るって事はその魔王にも喧嘩を売るって事だ! その意味が【黙りなさい】私の話はまだ終わってないわ。」ガチン

あつ危ない!

ガシツ 「女の人を殴るのは駄目だよ。」

コノハ! ナイスタイミングだ!

「ふっ!」

「ギッ!」

「さて、ガルドさん。私は貴方の上に誰が居ようと気にしません。だって、私達の最終目標は、コミュニティを潰した『打倒魔王』だもの。」

「それに私とシンタローがいれば基本倒せない敵はいないからの。」

「あら、それは心強いわね。そういうこと。つまり貴方には破滅以外のどんな道も残されていないのよ。」

「く、くそ!」

「だけどね。私は貴方のコミュニティが瓦解する程度では我慢出来ないの。貴方のような外道はズタボロになって己の罪を後悔しながら罰せられるべきよ。・・・そこで皆に提案なのだけれど」

この流れでいったら多分やるんだろうな。

「私達と【ギフトゲーム】をしましょう。貴方の『フォレス・ガロ』存続と『ノーネーム』の誇りと魂を賭けて、ね。」

まあ、やるならとことんやるか!

第4話

時を少し遡って

シンタロー視点

「ヤハハハハハハハハ！俺についてこれるとかお前中々やるな！流石長生きしてるだけはあるな！」

「お前こそ俺の速度についてこれるとか本当に人間か？人間にしてはおかしいぞ。」

「ヤハハハハ！俺は正真正銘純粹培養の人間だぜ！」

「培養されてたらお前純粹じゃないだろ。」

「おっ。もうそろそろ着くな。俺はこのまま世界の果てを見に行くがお前は どうするんだ？」

「ちよつとその辺を散策してくるわ。昔の知り合いにも会いたいしな。」

多分こいつはこのまま行くとあいつがいる所に着くからな。その時にこいつの力の一部は見れるだろ。

「終わったら頑張って俺を探してくれ。それか何か分かりやすい印でも上げてくれ。」

「ヤハハハ！了解したぜ！んじゃあな、また後でな！」

「おう。」

ふう。やつと一人になれた。さてと、バレないくらいの場所で、尚且つうまく戦う所が見れる所を探さないと。んー、あの木の頂点ぐらいで後は能力を使えばいいか。

よし。着いたと。後は「目を消す」つと。これでバレないだろ。それにしても、十六夜のギフトは一体何なのだろうか。俺の速度についてこれただけじゃなくまだ余裕もあつたしな。それに多分腕力とかもかなり高いだろうし、それだけならかなり高位の身体強化システムのギフトなんだろうが、おかしいのは十六夜のギフトが「見えない」事だな。普通のやつなら見えてるはずなのにな。現に飛鳥と耀のギフトは見えたし、となるとあいつのギフトにギフト無効化のギフトがあるのか？普通天地を砕くギフトとギフトを無効化する効果が同じギ

フトにあるのはおかしいから二つあるというのが当たり前だな。だが、もし一つだったのならあいつは。候補者の可能性が高いな。まあこれから解いていけばいいか。同じコミュニティに所属する仲間だからな。おつ。そろそろか。ここなら声も聞こえてくるかな。

『よく来たな人間。私は蛇神。ここまで来た褒美だ。知恵、力、勇氣』の三つの中から選べ。この私が試してやろう。』

「んだとコラ。なに上から目線で見てるんだよ。てめえ程度の実力で俺を試すだど？舐めてんのかお前。そーゆーのはちやんと実力を示してから言え、蛇野郎。」

十六夜の奴挑発してんなー。まああいつもあの程度の挑発には乗らないだろ

『なんだと?!ただの人間の分際で!よかろう。我が力とくと見せてやろう!!』

「ヤハハハハハハ!そう来なくっちゃなあ!」

乗っちゃったよ。お前そんな分かりやすい挑発に乗るとか本当に神格持ちなの?どんだけ短気なの?それにしても十六夜の奴やつぱ速度で俺についてきただけはあるな。あいつの攻撃が全然当たってねえ。それに頭の回転も速そうだな。これからのいい戦力になりそうだ。おつと、もうそろそろ終わるか?そんじや、そろそろ十六夜の所に行くかな。

「おらよー!」ドゴンツ!

『ぐあつ!』バシヤアアアアアン!

「おいおい、こんなもんで終わりかよ。つまんねえな。チツ、せつかく乾いたと思ったのにまた濡れちまったじゃねえか。」

「おい十六夜、お前さつきから何やってたんだ?ところどころにクレーターが出来てるじゃねえか。」

「ん?おう、シンタローか。別に、ただでけえ蛇が喧嘩売ってきたから買って吹っ飛ばしたただけだ。」

「いや、何やってんだよ。」

「やつと追いつきましたよ御二方!一体何をしていたんですか!特に

十六夜さん！」

「なんで俺なんだよ。シントローはいいのかよ。」

「シントローさんは昔から興味のもたものを研究する為に一週間引きこもったり、一ヶ月ほど帰って来ない事もありますが基本はそこまで迷惑をかけたらしませんか？、どちらかと言うと迷惑をかけられた方ですからいいんです！」

「いや、それもなかなかじゃね？」

「いいんです！それより、途中で会ったユニコーンさんが言っていましたけど水神のゲームに挑んだって本当ですか?!」

「水神？なあシントロー、水神ってのはどんな奴なんだ？」

「あいつだ。」

バツシャアアアアアアアン!!

『小僧が!!よくもやってくれたな!!』

「蛇、蛇神じゃないですかあああああ!!しかもかなり怒ってますよ！一体何をしたんですか?!」

「ちよつと吹っ飛ばしたただけだ。しかし、力を見せてやると言っていたがこんなもんか。がっかりだぜ。」

『貴様！付け上がるな人間！我がこの程度で倒れるか!!』

へえ。あいつこの18年で少しは強くなってるな。まあこの程度じゃ十六夜には傷一つつかないだろうが。

「十六夜さん下がって！」

「何を言ってるやがる。下がるのはテメエだろうが黒ウサギ。これはあいつが売って、俺が買った喧嘩だ。手を出せばお前から潰すぞ。」

ほう。中々良い殺気を出すな。

『心意気は買ってやる。それに免じ、この一撃を凌げば貴様の勝利を認めてやる。』

「寝言は寝て言え。決闘は勝者が決まって終わるんじゃない。敗者を決めて終わるんだよ。」

『フン、その戯言が貴様の最期だ!』

へえ、中々だなこれは。流石は仮にも“神格”を持つやつだな。だがこれ、俺も巻き込まれそうなのは怒り狂ってるせいで俺に気付いて

ないからか？もし気付いてやっているならお仕置きしなきゃな。

「十六夜さん！」

「ハッ！しゃらくせえ!!」

「嘘!？」

『馬鹿な?!』

「へえ。」

まさか、あれを腕の一振りですべて消すとわな。あいつ本当に人間か？

「ま、中々だったぜオマエ。」ズドン!!

バツシヤアアアアアアン!

やべ、濡れる。

「くそ、今日はよく濡れる日だ。クリーニング代は出るんだよな黒ウサギ。」

「黒ウサギは今お前がやった事に対してパニックになってるから聞いてないぞ。それよりもお前どうしてくれるんだよ。俺まで濡れちゃったじゃねえか。」

「おう、それは悪かったな。所で俺がやった事ってなんだ？」

「そりゃあお前、ただの人間が神格持ちを倒したってだけでも驚きなのにそこに腕力だけっていうおまけ付きだ。呆然とするに決まっているだろ。まあいいや。十六夜、さっさと黒ウサギを連れてこい。お前が行きたがってた世界の果てに行つてから箱庭に向かうぞ。俺も久しぶりに会いたい奴とかいるからな。」

「おう、ちよつと待ってる。」

箱庭か。あいつはおそらく魔王に連れてかれてしまったのだろう。だが、あいつらがそう簡単に負けるとは思えないんだがな。俺がいなくなつて戦力が落ちたのはあるがそれでもあいつらは強かつたんだがな。特にリーダー。まあ、” を滅ぼした敵について の情報も少ないし、箱庭に戻つたらあのバカに聞けばいいか。

「おう、待たせたなシンタロー。」

「見てください、シンタローさん！こんなおつきな水樹の苗が貰えませんでしたよ！これでもう他所のコミュニティから水を買う必要もなくな

ります！皆大助かりですよ！」

「そりゃあ良かったな。幸先のいいスタートだな。」

「はい！……所で十六夜さん、一つ質問しても良いですか？」

「却下。嘘。どうぞ。」

「え？ああ、はい。十六夜さんはどうして黒ウサギ達に協力してくれるのです？」

「んー……答えてもいいけど、ただ答えるのはつまらんな。質問を変えるけど、黒ウサギはどうして俺が“世界の果て”を見てみたいのだと思う？シンタローも答えてもいいぞ。」

「俺はもう答えがわかってるから遠慮しとく。」

「そうか。早えなオイ。それじゃあ黒ウサギだけか。それで分かったか、黒ウサギ？」

「やつぱり……面白そうだからでしょうか？十六夜さんは自称快樂主義ですし。」

「半分正解。なら、俺はどうして面白いと感じたんだろうな？」
「むくくく？」

「ハイ、タイムアウト。それじゃあシンタロー、正解をどうぞ！」

「制限付き!?だ、駄目ですよ！ゲームの時間制限は最初にも「黒ウサギうるせえぞ。シンタローの答えが聞けねえじゃねえか。」ハイ。」

「そんじやあ気を取り直してもう一度、シンタロー正解をどうぞ！」

「ハア。分かったよ。正解は“ロマンがあるから”だろ？」

「“ロマン”ですか？」

「正解だ。流石シンタロー！そうだ。俺のいた世界は先人様方がロマンというロマンを掘りつくして、俺の趣向に合うものがほとんど残って無かったんだよ。だからここじゃない世界なら、俺並に凄いものがあるかもしれないとおもったのさ。だからつまり“世界の果て”を見に行くのは、生きていくのに必要な感動を補充しに来たってところかな。」

「な、なるほど。十六夜さんはロマンのあるものを見て感動したいのですね。」

「ああ。感動に素直に生きるのは、快樂主義の基本だぜ？」

「そうですか………んん？あれ、じゃあ十六夜さんが黒ウサギに協力して、くれるのは、」

「随分と陽が暮れてきたな。日が落ちると虹が見えないかもしれないし、急ぐぞ。」

別に日が暮れても絶景なんだがな。まあ昼夜両方見たいんだろう。

「天動説のように、太陽が廻っているんだな。」

「分かりますか？あの太陽はこの箱庭を廻り続ける正真正銘、神造の太陽です。噂では、箱庭の上層部で太陽の主権を賭けたゲームがあるそうですよ。」

「俺は参加しなかったがやってたなそういや。」

「そりゃ壮大だ。是非とも一度参加してみたいね。」

結局あのゲームは誰が勝利したんだろうな。まあ、そんな事はどうでもいいな。もうそろそろつく頃だな。

「お………！」

「へえ………！」

これは中々に綺麗だな。あんま来た事無かったから知らなかったな。もし行けたらあいつとここに来るのも悪くないな。

「どうですか？横幅の全長は約2800mもあるトリトニスの大滝でございます。こんな滝は十六夜さんの故郷にもないのでは？」

「………ああ。素直にすぎえな。ナイアガラのごつと二倍以上の横幅ってわけか。この『世界の果て』の下はどんな感じになっているんだ？やっぱり大亀が世界を支えているのか？」

「残念ながらNOですね。この世界を支えているのは『世界軸』と呼ばれる柱でございます。何本あるのか定かではありませんが、一本は箱庭を貫通しているあの巨大な主軸です。この箱庭の世界がこのよりの不完全な形で存在しているのは、何処かの誰かが『世界軸』を一本引き抜いて持ち帰った、という伝説もあるのですが………」

「はは、それすぎえな。ならその大馬鹿野郎に感謝しねえとな。………トリトニスの大滝、だったな。ココを上流に遡ればアトランティスでもあるのか？」

「さて、どうでしょう。箱庭の世界は恒星と同じ表面積という広大さ

に加え、黒ウサギは箱庭の外の事はあまり存じ上げません。……シンタローさんは知っていますか？」

「俺か？確かに知っているが……言わない方がいいな。」

「なんでですか？」

「だって知らない方が……ロマンがあるだろ？」

「ヤハハハハ！そうだな。いずれ自分で見に行った方がいいもんな。サンキューなシンタロー。」

「おう。さて、そろそろ箱庭に戻るか。十六夜、黒ウサギ、走るぞ。」

「ヤハハハハ！了解だ！遅れんなよ！」

「分かりました。それでは行きましょう！」

そして時は戻って

キド視点

「な、なんであの短時間に『フロレス・ガロ』のリーダーと接触してしかも喧嘩を売る状況になったのですか?!」「しかもゲームの日取りは明日?!」「それも敵のテリトリー内で戦うなんて!」「一体どういうつもりがあつてのことです!」「聞いているのですか皆様方!!」

「『ムシヤクシヤしてやった。今は反省しています。』」

「『す、すみません。』」

「黙らっしやい!!!」

やっぱりこうなつたか。というかお前達息ピッタリだな。

「別にいいじゃねえか。見境なく選んで喧嘩売ったわけじゃないんだから許してやれよ。」

「い、十六夜さんは面白ければいいと思つているかもしれませんが、このゲームで得られるものは自己満足だけなんですよ?この『契約書類』を見てください。」

「『参加者が勝利した場合、主催者は参加者が言及する全ての罪を認め、箱庭の法の下で正しい裁きを受けた後、コミュニティを解散する』——まあ、確かに自己満足だ。時間をかければ立証出来るものを、わざわざ取り逃がすリスクを背負ってまで短縮させるんだからな。」

確か俺達のチップは『罪を黙認する』だったな。しかも永久に。

「でも時間さえかければ、彼らの罪は必ず暴かれます。だって肝心の

子供達は……その」

「そう。人質は既にこの世にいないわ。その点を責め立てれば必ず証拠は出るでしょう。だけどそれには少々時間がかかるのも事実。あの外道を裁くのにそんな時間かけたくないの。」

「まあ、近くに簡単に人を殺すような奴はいて欲しくないからな。そういう奴は早めに対処するに限るさ。」

「あら、いい事言うわねキドさん。それにね、黒ウサギ。私は道德云々よりも、あの外道が私の活動範囲内で野放しにされることも許せないの。ここで逃せば、いつかまた狙ってくるに決まっているもの。」

「ま、まあ……逃げれば厄介かもしれませんけれど」

「僕もガルドを逃がしたくないと思っている。彼のような悪人は野放しにしちやいけない。」

「はあく……仕方がない人達です。まあいいです。腹立たしいのは黒ウサギも同じです。『フォレス・ガロ』程度なら十六夜さんかシンタローさんが一人いれば楽勝ですし。」

まあ、多分そうなんだろうな。ん？どうしたんだ、十六夜も飛鳥もそんな怪訝な顔して？

「何言ってるんだよ。俺は参加しねえよ？」

「当たり前よ。貴方なんて参加させないわ。もちろんシンタローさんもね。」

「だ、駄目ですよ！御二人はコミュニティの仲間なんですからちゃんと協力しないと」

「そういう事じゃないんだろ黒ウサギ。」

「そうだぞ黒ウサギ。いいか？この喧嘩はコイツらが売った。そしてヤツらを買った。なのにその場にいなかった俺やシンタローが手を出すのは無粋だと言ってんだよ。」

「あら、分かっているじゃない。」

「こんだけ言われたら黒ウサギでも流石に折れるだろう。」

「……ああもう。好きにして下さい。」

やっぱり折れた。

「それで黒ウサギ。これからどうするんだい？このままコミュニティに向かうのかい？」

「いえ、明日飛鳥さん達がギフトゲームをすると言うのならギフトを鑑定しに『サウザンドアイズ』に行こうと思っています。」

「『サウザンドアイズ』？」

「はい。まあ説明は歩きながらするので行きましょう。ジン坊っちゃんには先に帰って子供達に水路を整備しておくように言っといて下さい。」

「分かったけど、なんで水路を整備するんだい？」

「十六夜さんがこんな大きな水樹をとってきてくれたんです！これでもう水には困りませんよー！」

「本当?!分かった、それじゃあ先に帰って伝えておくね。それでは失礼します。」

「はい！気を付けて帰って下さいね！さてそれでは行きましょうか皆さん。『サウザンドアイズ』へ！」

第5話

キド視点

「それで『サウザンドアイズ』ってというのはどういうコミュニティなの?」

「そういやさつき歩きながら話すとか言っていたな。」

「はい。『サウザンドアイズ』は特殊な『瞳』のギフトを持つ者達の群体コミュニティです。箱庭の東西南北・上層下層の全てに精通する超巨大商業コミュニティです。この近くにはちようど支店があるのでそこに行きます。そこで皆さんのギフトの鑑定をお願い致します。」

「ギフトの鑑定つてのはなんだ?」

「もちろ!自分のギフトの秘めた力や起源などを鑑定する事だよ。自分の力の正しい形を把握していた方が、引き出せる力はより大きくなるからな。お前らはともかく十六夜達は力の出どころは気になるだろ?」んつて!シンタローさん!なんで言っちゃうんですか!?!今私が説明してましたよね?!」

「ま、まあそれはあるけれども。」

「ま、そーゆうのは後で考えればいいぞ。今大切なのはギフトの力をうまく使う事だからな。過去の事なんか気にしたって意味無いぞ。」

「……………そうね。ありがとう。」

「おう。」

「なんというか……………シンタローが凄い大人だ。まあ、実年齢を考えれば大人どころかおじいちゃん領域すら通り越してるからな。当たり前か。おや?あれは……………桜か?でも花卉の形とかが違うな。『これは……………桜の木?でも花卉の形は違うし、真夏になっても咲き続けるはずはないと思うのだけれど……………。』」

「いや、まだ初夏になったばかりだぞ?気合いの入った桜が残っていてもおかしくないだろ。」

「……………?今は秋だったと思うけど。」

「僕達は季節としたら夏かな?ねーキド?」

「ああ。まあ、あそこに季節があるかはわからないがな。」

「季節ならあるぞ？あの時は確かに夏だな。」

「え?!あそこって季節があつたの?!」

「じゃないとつまらなかつたしの。色々付け加えてたんじゃ。今じゃWifiも通つておるぞ?。」

「てことはまたゲームとか出来るって事?」

「そうじゃよ。」

「本当?!やつたー!シンタロー、またバトルしなさいよ!」

「はいはい、分かりましたよ。閃光の舞姫様。」

「その名前で呼ぶなー!!」

「た、貴音先輩落ち着いて。シンタローも挑発しないの!」

「だって反応がおもしろえんだもん。」

「もう!」

「なら今度皆でゲーム大会でもする?」

「ヤハハハハハハハハハ!いいな、それ。俺も混ぜろ!」

「………私もやりたい。」

「そのげーむというものがどんなものか知らないけど私も混ぜてくれないかしら。」

「それじゃあまた今度私の世界でやるかの。」

「み、皆さーん!もうすぐ着きますよー!」

お、あの店か。ってもう暖簾しまいはじめてるぞ?。

「なあ、黒ウサギ。暖簾片付け始めてるがいいのか?」

「へ?あつ!ちよつと待つて下さーい!」

「待つたなしですお客様。うちは時間外営業はやっていません。」

やっぱ駄目だったか。ていうか黒ウサギ、別に睨んでも意味無いんじゃないか?。

「なんて商売ツ気の無い店なのかしら。」

「ま、全くだす。閉店時間の五分前に客を締め出すなんて!」

「五分前って。黒ウサギ、それはお前が悪いぞ。」

「で、ですがキドさん!」

「文句があるならどうぞ他所へ。あなた方は今後一切の出入りを禁止

ます。出禁です。」

「出禁?!これだけで出禁とかお客様舐めすぎでございますよ?!」
確かにこれだけで出禁ってのはやりすぎだな。

「はあ。やっぱあんたの頭はいつまでたっても硬いまんまだな。」

「貴方は……?!一体いつ帰ってきたのですか?」

「今日黒ウサギに呼び出されたんだよ。コイツらと一緒に。それよ
り、アイツ呼んできてくれないか?黒ウサギの名前を使つて。いるん
だろ?」

「はあ。あなたが相手なら仕方ないですね。分かりました、呼んでき
ます。その『箱庭の貴族』の名前を出せばいいのですね?」

「ああ。したら飛んでくるだろうからな。迷惑かけて済まないな。
今度愚痴でも聞いてやるよ。」

「お願いします。……それでは失礼します。」

シントローの影響力は凄いな。

「へえ!シントローすげえな!それに比べて黒ウサギの使えなさ
といたらこれはもう『箱庭の貴族(恥)』だな。」

「いえ、『箱庭の貴族(笑)』じゃないかしら?」

「いつその事『箱庭の貴族(爆笑)』ってのはどう?」

「それだ!」

「それだ!じゃないですよ!このおバカ様方!」スパアーン!

「シントローくん凄いな。やっぱり長く生きただけはあるね。」

「まあな。つと、もうそろそろかな?」

「え?何か起こるの、シントロー?」

「まあ、見てろ。」

「いいいいいやほおおおおおお!久しぶりだ黒ウサお「おら!」ぶ
ぺっ!」バツシヤアーン!

「きやああああ!つてあれ?」

「ふう。」

「シントロー、今のは?」

「ああ、今のは」

「誰じゃ!この私を蹴り飛ばしたのわ!?私の事を『階層支配者』と

しつての狼藉か!？」

「蹴ったのはおれだが、何か文句でもあるか？このバカ。」

「大有りじゃよ!!ってお主、シンタローではないか!？」

「兄さんだけじゃないぞ、このバカ。」

「お主はアザミか!？」という事は連れて帰ってこれたということか、シンタロー!？」

「そうだよ。まあ、十八年かかったけどな。」

「でも連れて帰ってこれて、良かったの、シンタロー。」

「ああ。色々迷惑かけたがありがとな、白夜叉。」

「なんのなんの。それより今日はどんな用件で来たんじゃ?」

「それについては黒ウサギに聞いてくれ。」

「は、はい。お久しぶりです、白夜叉様。」

「うむ、久しぶりじゃな、黒ウサギ。」

「ねえ、貴女はこのお店の人なの?」

「おお、そうだとも。この『サウザンドアイズ』の幹部様で白夜叉様だよ。ご令嬢。仕事の依頼ならおんしのその年齢のわりに発育がいい胸をワンタッチ生揉みで引き受けるぞ?」

「オーナー。それでは売上が伸びません。ボスが怒ります。」

「おっお疲れさん。済まなかつたな。」

「いえ、これくらいならオーナーの日頃の行いに比べたらなんとでも。」

「そうか、苦勞してんだな。やっぱり今度どっかの店で愚痴でも聞いてやるよ。」

「是非ともお願い致します。」

何かあつちでシンタローと店員さんが遠い目してるな。大丈夫か?」

「ふふん。お前達が黒ウサギの新しい新しい新しい同士か。異世界の人間が私の元に来たという事は……遂に黒ウサギが私のペットに」

「なりません! どういう起承転結があつてそんな事になるんですか!？」

「おいバカ。早く部屋に上げてくれないか？こっちは1回世界の果てに行ったりして疲れてんだ。」

「そ、そうか。分かった。だが、私の私室だと少し狭いので応接室に行くとするか。」

「分かった。よし、行くぞお前ら。」

「は、はい！」

なんとというか・・・シンタロー（さん／くん／の奴）キャラ変わった（てね／てない／た）？メカクシ団の心が一つになった瞬間だった。

「それじゃあもう一度自己紹介しておこうかの。私は四桁の門、三三四五外門に本拠を構えている。『サウザンドアイズ』幹部の白夜叉だ。この黒ウサギとは少々縁があつてな。コミュニティが崩壊してからもちよくちよく手を貸してやつている器の大きな美少女と認識しておいてくれ。」

「はいはい、お世話になっております本当に。」

「その外門、つて何？」

「箱庭の階層を示す外壁にある門の事だよ。数字が若い程都市の中心部に近く同時に強大な力を持つ者達が住んでいるんだ。見た目はまあ、バームクーヘンみたいな形を思い浮かべればいいと思うぞ。」

「分かった。」

「なるほど、そう例えればわかりやすいの。その例えなら今いる七桁の外門はバームクーヘンの一番薄い皮の部分に当たるな。更に説明するなら、東西南北の四つの区切りの東側に当たり、外門のすぐ外は『世界の果て』と向かい合う場所になる。あそこにはコミュニティに所属していないものの、強力なギフトを持った者達もおるぞ。」

何それ、世界の果てキツすぎだろ。よくシンタローと十六夜は帰つてこれたな。

「お主が持っているその水樹の持ち主などな。」

あ、既に倒していたのか。この二人はどんだけ強いんだよ。

「して、一体誰が、どのようなゲームで勝つたのか？知恵比べか？勇気を試したのか？」

「いえいえ。この水樹は十六夜さんがここに来る前に蛇神様を素手で

叩きのめしたのですよ。」

黒ウサギ、お前が自慢する事じゃないと思うぞ？

「なんと!? クリアではなく直接的に倒したとな!? ではその童は神格持ちの神童か?」

「いえ、黒ウサギはそう思えません。神格なら一目見ればわかる筈ですし。」

「む、それもそうか。しかし、神格を倒すには同じ神格を持つか、互いの種族に余程崩れたパワーバランスがある時だけのはず。種族の力でいうなら蛇と人ではどんぐりの背比べだぞ。」

つまり、十六夜は異常という訳か。なるほど。

「白夜叉様はあの蛇神様とお知り合いだったのですか?」

「知り合いも何も、アレに神格を与えたのはこの私だぞ。もう何百年も前の話だかの。」

「へえ?じゃあお前はあの蛇より強いのか?」

「ふふん、当然だ。私のは東側の『階層支配者』だぞ。この東側の四桁以下にあるコミュニテイでは並ぶ者がいない、最強の主権者なのだからの。」

ちよつ、十六夜と飛鳥と耀はどんだけ目を輝かしているんだよ。

「まあ、俺には負けるけどな。」

「私にも負けるがの。」

「なんだ、最強ってのは名ばかりじゃねえか。」

「そうね。自分で最強って言ってるけど実際はそこまで強くないのかもね。」

「がっかり。」

「う、うるさい!そこの二人がチートなだけじゃ!何なんじゃよ、もう。倒しても倒しても復活してくるん相手をどうやって倒せというんじゃよ。精神的に屈服させようとする逆にとっちの心がおられそうになるし・・・」ブツブツ

な、なんか最初とキャラ違くないか?

「まあこんな変な奴だが実力は確かだから安心しろ。お前も戻ってこい。」

「はっ?!そ、そうじゃった。それでお主たちは私とギフトゲームをするのか?」

「ああ。やろうじゃねえか。階層支配者の力、見せて貰おうじゃねえか。」

「ええ。とても面白そうじゃない。」

「やりたい。」

え、やるの?」

「そこのお主たちはどうするんじや?」

「僕はやりたいなー。」

「俺もツス!」

「わ、私も。」

「私もやります!」

「ゲームならやらない理由は無いわね。」

「僕もやるよ。」

「力がどれだけ通用するか分かんないけど僕もやろうかな。」

「私もやるわ。」

「やりたい!」

「と、いう事だから参加するよ。」

「うむ、分かった。それと一つ聞いておこう。」

何だ?それとあのカードは何だ?

「お主たちが挑むのは『挑戦』か?それとも 『決闘』か?」

「『『『『『『『『『『『』』』』』』』』』」

「おー懐かしいなー。」

「うむ。私のカゲロウデイズと違って綺麗だしな。」

「さて、改めて名乗ろう。太陽と白夜の星霊で夜叉の神格を持つ者、そして、『白き夜の魔王』の白夜又じや。そして問おう。お主たちが望むのは、試練への『挑戦』か?それとも対等な『決闘』か?」

な、何だこれは!俺達は今応接室に居たはずなのに一瞬のうちにこんな場所に移動しただと?!常識外れにも程があるぞ!」

「あいつ、かなりカッコつけてんな。」ボソボソ

「そうじゃな。まあ色々失敗してたからの。」ボソボソ

おい、その二人聞こえてるぞ。何か今の聞いたらあまり怖くなくなっただが。

「そうか。白夜と夜叉……この世界はお前自身を示しているのか。」

「正解じゃ。それでどうする？ 『挑戦』か『決闘』か。」

くっ、これは勝てないな。皆もそう思ってるだろうな。

「……………はあ。しょうがねえ、今回は試されてやるよ、魔王様。」
「試されてやるってどんだけプライド高いんだよ、あいつ。」ボソボソ
「まあ、それはあいつの育った環境が関係するから仕方ないぞ、兄さん。」ボソボソ

だから聞こえてるって。

「そこのお主たちもそれでいいか？」

「え、ええ。悔しいけどね。」

「いつかギャフンといわせてやる。」

「それは古くないか？」

「俺達もいいぞ。」

「いつかりベンジしてやるけどねー。」

「カカカ！何時でも待つとるぞ。さて、それではどんなギフトゲームにしようかの？」

さて、鬼がでるか蛇が出るか。ん？今の声は何だ？

「あの声は、あやつか丁度いいな。」

「今の声は？」

「すぐに分かるぞ。ほれ、もう見えるぞ。」

「え？あれってまさか……………グリフォン?!」

「そうじゃ。空の王にして獣の王。『知恵』『力』『勇気』の全てを兼ね備えておる、まさに幻獣の中の幻獣。丁度いいじゃろ？」

『ギフトゲーム名

『鷲獅子の手網』

・プレイヤー名

逆廻十六夜

久遠飛鳥

春日部耀

木戸つぼみ

瀬戸幸助

鹿野修也

小桜茉莉

如月桃

榎本貴音

雨宮響也

九ノ瀬遥

朝比奈ひより

楯山文乃

・クリア条件

・クリア方法

認められる。

・敗北条件

なった場合。

宣誓

フトゲームを開催します。

グリフォンの背に跨り、湖畔を舞う。

“力” “知恵” “勇気” の何れかでグリフォンに

降参か、プレイヤーが上記の勝利条件を満たせなく

上記を尊重し、誇りと御旗とホストマスターの名の下、ギ

“サウザンド

アイズ”印』

第6話

キド視点

『ギフトゲーム名 〃鷲獅子の手網〃』

・プレイヤー名

逆廻十六夜

久遠飛鳥

春日部耀

木戸つぼみ

瀬戸幸助

鹿野修也

小桜茉莉

如月桃

榎本貴音

雨宮響也

九ノ瀬遥

朝比奈ひより

楯山文乃

・クリア条件 グリフオンの背に跨り、湖畔を舞う。

・クリア方法 〃力〃 〃知恵〃 〃勇気〃 の何れかでグリフオンに認められる。

・敗北条件 降参か、プレイヤーが上記の勝利条件を満たせなくなった場合。

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗とホストマスターの名の下、ギフトゲームを開催します。

〃サウザンドアイズ〃印』

さて、一体誰が出るべきか……………
「私がやる。」

早っ!?! どんだけやりたいんだよ。

「おいおい、大丈夫なのか？」

「大丈夫、問題ない。」

それは死亡フラグじゃ・・・

「ほう、お主か。まあ、頑張れ。」

「うん。」

「耀」

どうしたんだ、シントロー？

「何？」

「これを羽織ってけ。」

何だ？あの半透明の布は？

「シ、シントローさん。そ、それってもしかして“天の羽衣”ですか

？」

「よくわかったな、黒ウサギ。正解だ。」

「そりゃあそんな有名なギフトぐらいは知ってますよ！風圧耐性のあ
るギフトの中では最高峰のギフトをどうやって手に入れたんですか
!？」

「昔、ギフトゲームで勝利して手に入れたんだよ。まあ、今回はグリ
フォンに乗って湖畔の周りを一周するっていうゲームだからな。か
なりの風圧はあるだろう。流石に温度の調節は出来ないが風圧はか
なり軽減されるはずだからな。」

「分かった、ありがとう。」

「おう。その代わり絶対クリアしろよ？」

「うん、分かっている。」

「ならよし。頑張れ。」

「行つてきます。」

「ああ・・・さて、耀は果たしてどこまでくらいつけるかな？」
「いや、あのギフトを渡した時点でほぼクリアは決定じゃないですか
？」

「わかんないぞ？風圧は防いでも振動とかは消せないからな。もしか
したら途中で振り落とされるかもしれない。まあ、そこら辺も大丈夫
だろうけど。」

「そうですか。それじゃあ耀さんがクリア出来るように祈って待っていきましょう。」

「祈るって誰にだ？」

「それはもちろん、帝釈天様ですよ！」

「そうか。まあ、おとなしく見てろよ。」

「はい！」

さつきから思うんだがやっぱりシントローのキャラ違くない？

耀視点

シントローが貸してくれたこの布、すっごく軽い。まるで重さを感じない。折角シントローが貸してくれたんだから何がなんでもクリアしないと。

「こんにちは。私の名前は春日部耀です。」

『!? お主、私の言葉が分かるのか?』

「はい。それでゲームの事なんですけど、単刀直入に言います。私と誇りをかけて勝負をしませんか？」

『何?』

「あなたが私を背中に乗せて湖畔を一周する間に私を落とせなかったら私の勝ち。落とせたらあなたの勝ち。」

『なるほど。確かに途中でお主を落とせなかったら私の誇りが傷付くだろう。ならばお主は何を対価にするんだ? 生半可な物では受付ないぞ?』

そんなの決まってる。

「命をかけます。」

『ほう?』

「途中で落ちたらまず間違いなく死にます。運良く生き残っても今日のあなたの晩御飯になります。」

「なっ!? 春日部さん何を言っているの!？」

「そうだぞ! 早くその言葉を撤回しろ!」

「静かにしろ、二人共。」

「シントローの言う通りだぜ。お前らは春日部が見せた覚悟を踏みに

じるつもりか？」

「そ、そういうわけじゃないのだけれど・・・」

「仲間の心配をして何が悪い！」

「いや、心配するのは悪くねえよ。ただし、今回は春日部自身が自分の命を賭けて挑むんだ。外野は黙っとけ。」

「くっ！」

「飛鳥もキドもそう言ってくれるのは嬉しいよ。でも、大丈夫。絶対負けないから。」

「・・・そう、分かったわ。負けたら許さないからね。」

「うん。」

「気を付けろよ。何かあったらすぐに助けるからな。」

「分かった、ありがとう。」

「おい、もうそろそろ始めるぞー。」

「今行く。それじゃあ行ってきます。ちゃんと見ててね？」

「分かってる（わよ）。」

私の事を心配してくれてる友達がいる。それだけで絶対に勝てる。

『それでは準備はいいか？』

「うん、大丈夫。」

あ、そうだ。

「先に一つだけ言っておくけど私、あなたの背中に乗る事が夢だったの。」

『・・・そうか。』

「うん、それだけ。」

『よし、ならば行くぞ！』バサツ！

「春日部さん大丈夫かしら？」

「信じてやれよ、お嬢様。友達なんだろう？」

「・・・そうね。友達なもの。ちゃんと応援しなくちゃ。春日部

さーん！頑張ってー！」

「ヤハハハハハ！その調子だぜ、お嬢様。」

「すごい、あなた空を踏みしめて跳んでいるんだ！」

『まだいけるか？』

「大丈夫。」

『なら、速度を上げるぞ!』ゴウツ!

風圧はシントローが貸してくれたこのギフトでなんとかなってるけど気温が下がってきたからちよつと寒いな。それに服もちよつと凍ってきたし。

『中々やるではないか。』

「あなたこそ。でも私はまだ余裕だよ?」

『ほう?ならば我が最速を耐えて見せよ!』

すごい!黒ウサギが言うには風圧耐性のギフトの中でも最高峰のギフトなのにその効果の限界を超えて風が来た!これがグリフオンの本気!でも、それでも耐えられる!

「おつ帰ってきたぞお嬢様。」

「え?あ!本当だわ!帰ってきたわ!」

「ほう。あやつ本気を出したか。」

「グリフオンが本気を出したんですか!?春日部さんは大丈夫でしょうか?」

「あの感じだと“天の羽衣”の効果の限界を超えられてるな。軽減はされているがそれでもかなりの風圧だろう。」

「さらに飛んでる場所が山頂とほぼ同じ高さだから気温も低いしの。体感的には—何数十度といった所じゃな。」

「それやばくないですか!」

「まあ、あいつのギフトなら大丈夫だろ。」

「?シントローさんは耀さんのギフトを知っているのですか?」

「正確には“識っている”けどな。まあ、あまり詳しくは聞かないでくれ。」

「あ、はい。わかりました。」

「そうだ。ねえ」

『む?まだ喋れるか。なんだ?』

「このゲームで勝ったら私と友達になって。」

『フツ、いいだろう。なら最後だ。飛ばすぞ!』

また早くなった!でも私の勝ちだ!この力は………そうだ!

『見事。お主の勝利、なっ!?』

「「「「「(春日部／耀) (さん／ちゃん)！」「「「「「」」」」」」」」

シインタローとアザミさんと十六夜以外の皆がびっくりしてる。

「早く耀さんを助けないと！」

「待て黒ウサギ。」

「なんですか十六夜さん！」

「まだ終わってないからだよ。」

「え？」

十六夜やシインタローは気付いてるみたい。なんでだろ？まあいいや。それよりグリフォンさんみたいに飛ぶには大地を踏みしめるようにこうやって

「「「「「え?!」「「「「「」」」」」」」

「ヤハハハハハハハ！やっぱあいつ面白れえな！」

「まだ拙いけどうまくいったな。」

「兄さんの言った通りだな。」

ドツキリ成功だね。つてあ・・・やばい。

「やばい、十六夜！」

「了解だ！」ガシッ！

「あ、ありがとう。」

「ヤハハハハ。どういたしましてだぜ。」

「春日部さん大丈夫だった!？」

「大丈夫だよ。服がパキパキになったのと手の先がじんじんする程度だから。」

「全く最後はびっくりしたぞ。」

「ごめんなさい。」

「よろしい。これからはあまり無茶をしないようにな。」

「はい。」

「キド、お母さんみたいだね。」ニヤニヤ

「なっ!?!う、うるさいぞカノ！」

「キドお母さんごめんなさい。」

「よ、耀まで!?!」

「おーいお前らそんなぐらいにしとけよー。」

「あ、シンタローこれありがとう。おかげで助かった。」

「いや、無事なら何よりだ。お疲れさん。」

「ありがとう。」

「見事なゲームだったの。お主達の勝ちじゃ。」

『見事だ。そのギフトは勝利の証として存分に使ってくれ。』

「うん。ありがとう。友情の証として使わせてもらおうよ。」

『フツ。面白い娘だ。』

「所でお主のそのギフトは生まれた時から持ってたのか？」

「ううん。お父さんが作ってくれた木彫りのペンダントのおかげ。」

「ほう？スマンがちよっと見せて貰っても良いかの？」

「いいよ。はい。」

「ほほう。これはこれは・・・材質は楠の神木・・・？神格は残っていないようだがの。・・・この中心を指す幾何学線・・・

そして中心に円状の空白・・・お主の父親の知り合いに生物学者はおるかの？」

「うん。私のお母さんがそうだった。」

「生物学者ってことはやっぱりこの図形は系統樹を表してるのか白夜叉？」

「おそろくの・・・ならこの図形はこうで・・・この円形が収束するのは・・・いや、これは・・・これは、凄い!! 本当に凄いぞ娘!! 本当に人造ならおんしの父は神代の大天才だ! まさか人の手で独自の系統樹を完成させ、しかもギフトとして確立させてしまうとは! これは真正銘“生命の目録”と称して過言ない名品だ!」

「白夜叉、語るのもいいけど後にしてくれないか? いい加減ホームに帰りたいんだが。」

「む、それはすまなんだ。よかろう、ところで何しに来たんだっけの?」

「言いませんでしたっけ? ギフトの鑑定をお願いしようと思ってきたのですが。」

「おお、そうじゃった。だが私には専門外どころか無関係もいいところだからのー。……そうじゃー！ちよいと贅沢な代物だがコミユニティ復興の前祝いとしてあれをやろう。」パンパン

え？なにこれ？カード？なにになに？えーと私の名前とギフトネームで「生命の目録」と「ノーフォーマー」？なんだろうそれ？皆のやつは十六夜が「正体不明」で飛鳥が「威光」、キドが「隠す蛇」でカノが「欺く蛇」、セトが「盗む蛇」でマリーちゃんが「合わせる蛇」と「合体させる蛇」、モモちゃんが「奪う蛇」でヒビヤ君が「凝らす蛇」、コノハさんが「醒める蛇」と「人造人間」！？そ、それでタカネさんが「覚ます蛇」と「電子生命体」？ヒヨリちゃんが「冴える蛇」でアヤノさんが「かける蛇」、シンタローは……ってあれ？

「ねえ、シンタローとアザミさんの分はないの？」

「あやつらの分は既にあるからの。今持ってこさせておる。」
「なるほど。」

「ちよつ、ちよつと待って下さい白夜叉様。こ、これつてもしかして「ギフトカード」ですか!？」

??

「お中元？」

「お歳暮？」

「お年玉？」

「違います！なんでそんなに息ぴったりなんですか!？」

「これはギフトカードと言ってな。顕現しているギフトを収納出来る高価なカードなんだ。例を言えば耀の「生命の目録」や十六夜が手に入れてきた水樹とかをしまえるな。簡単に言えば素敵アイテムつてことだ。」

「「「「「なるほど。」」」」」」

「本来ならコミユニティの名と旗印も記されるのだが、おんしらは「ノーネーム」だからの。少々味気ない絵になっておるが、そこら辺の文句は黒ウサギに言ってくれ。」

「へえ？随分と気前がいいんだな。」

「言ったじやろう？コミュニティ復興の前祝いだ。」

「因みにギフトカードの正式名称は『ラプラスの紙片』。即ち全知の一端だ。そこに刻まれるギフトネームはお前らの魂と繋がった、『恩恵』の名称だ。鑑定は出来ずともそれを見れば大体のギフトの正体に分かるぞ。欠点はギフトの効果が無効化させるギフトとかは正式名称が出ずに違う名前で見ることがある事だな。」

へー。やっぱり長生きしてるだけはあるね。

「なるほど。てことは俺のは無効化する効果があるって事だな。」

「なに？小僧ちよつと見せてみる。」

あれ？でも十六夜は最初凄い勢いで走っていったけどあれはギフトの効果じゃなかったのかな？

「『正体不明』だと・・・？確かにシンタローが言った通り鑑定出来ないこともあるがそれはレアケースだ。普通なら無効化するとしてもちゃんとした名前が表示されるはずだ。」

「何にせよ、鑑定できなかつたって事だろ。俺的にはこの方がありがたいさ。」

「面白いから？」

「よくわかってるじゃねえか。」

やっぱり。この一日で何となく十六夜や他の皆の事が分かった気がする。でもやっぱりシンタローだけは分からないな。これから知っていけばいいか。あ、世界が元に戻った。

「失礼します。シンタロー様とアザミ様のギフトカードをお持ちしました。」

「おお、すまんの。それじゃああやつらに渡してやっておくれ。」

「わかりました。どうぞ。」

「ありがとな。」

「すまないの。ありがとう。」

「いえ、では失礼します。」

「うむ。助かった。それでお主たちはこれから自分のコミュニティに戻るのか？」

「はい。コミュニティの子供達に皆さんを紹介したいですし、今日は

皆さんお疲れでしょうから早く休ませて明日のガルド戦に備えないといけませんから。」

「なるほど。ガルドか。あやつのは行いは最近目に余るものがあるでう。ぜびとも潰して欲しいものじゃ。頑張れよ。」

「分かってるわよ。あんな外道許しておけないわ。」

「うん。」

「ああ。」

「そうか。それなら大丈夫だの。」

「それでは白夜叉様、今日はありがとうございました。」

「うむ。またいつでも来い。」

「次は黒ウサギをチップにしてゲームを挑む。」

「やめてください!!」

「本当か!やろう!ぜびやろう!絶対勝って見せるとも!」

「なら俺が本気で相手をしてやろうか?」

「げっ!シ、シンタロー相手だと元の姿に戻っても勝てるかどうか分からないんだがの。」

「へえ?やっぱりシンタローは強いのか?」

「それはもう、神話の主神が束になって挑まないと勝負にならないくらいなの。」

え?シンタローってそんなに強いのか?

「え!?シンタロー君そんなに強いのか!?元の世界だとジェットコースターに乗って酔って吐いたりしてたのに!」

「あれはただの演技だぞ。普段からジェットコースター以上の速度で動いてるのにそんなのに酔う分けないだろ?」

「」「」「た、確かに。」「」「」

「ヤハハハハハハ!なあ、シンタロー。今度どっかで戦おうぜ!」

「別にいいが負けても恨むなよ?」

「ヤハハ!そんな事しねえよ!」

「そうか。なら別にいいや。」

「皆さんお話は終わりましたでしょうか。それでは行きましょう!我らが「コミュニケーション」のホームへ!」

第7話

第7話

キド視点

これがコミュニティの居住区画の門か、案外でかいな。

「この中が我々のコミュニティでございます。しかし本拠の館は入口から更に歩かねばならないのでご容赦ください。この近辺はまだ戦いの名残がありますので……」

「戦いの名残？噂の魔王って素敵ネーミングな奴との戦いか？」

「は、はい。」

「ちようどいいわ。箱庭最悪の天災が残した傷跡、見せてもらおうかしら。」

「そうだな。東区画最強と言われていたコミュニティに勝ったような魔王だ、俺も気になるな。」

「とかいって本当は怖いんじゃないの？」ニヤニヤ

「なわけないだろ。黙れバカノ。」

「酷くない？」

「」「酷くない(わ／よ／ツス／な／ですね)」「」「」

「皆して言わなくてもよくない!？」

やっぱりバカノはうるさいな。

「皆さん？そろそろ入りますよ?」

「おう。行こうぜ。」

「それでは……」

な、なんだこの風景は!?!廃墟ばかりじゃないか!?

「っ、これは……!?!」

「おいおい、こんなのはアジ・ダ・カーハクラスの奴らじゃないと出来ねえぞ。」

「だが兄さん。アジ・ダ・カーハはすでに封印されている筈じゃ……」

「ああ、されている筈だ。だからアジ・ダ・カーハとは違う奴なんだろうけど、これほどとなると一体誰が……?」

しかし、これは一体どれだけの年月が経てばこんなになるのだろう

？

「……なあ、黒ウサギ。魔王とのギフトゲームがあつたのは何百年前の話だ？」

「僅か三年前でございませう。」

「……ハッ、そりや面白いな。いやマジで面白いぞ。この風化しきつた街並みが三年前だと？」「別にありえない事ではないぞ。箱庭には時間を操るギフトなんかもあるからな。最高峰のギフトにいたつては数百年分どころか数万年も時を進めたりすることも出来るからな。まあそんなだけ進めたらその分の反動はくるけどな。」

そ、そんなギフトまであるのか。

「へえ。やっぱり箱庭に来て良かったぜ。ところでシンタロー、一つ聞きたいんだけどいいか？」

「別にいいぞ、なんだ？」

「お前はこの風景を見てもなんとも思わないのか？自分が所属していたコミュニティがここまでボロボロにされてるのにお前には驚きや怒りつてのが全く感じられないんだよ。」

何を言っているんだ十六夜の奴は!?

「ちよっ、い、十六夜さん!？」

「黙れ黒ウサギ。俺は今真剣に聞いているんだ。」

「なるほどな。仲間の為に怒れない奴はいらないという訳か。」

「そういう事だ。それで、実際の所はどうなんだ？」

「そうだな、答え合わせといこうか。まず一つ目、俺がこの光景を見て驚いてないと言ったな。」

「ああ。言つたな。」

「それは正解だ。あいつらを倒せるような魔王ならこれくらいの事は出来るだろうと考えていたからな。流星に予想以上だったが。」

「なるほど、予想をしていたからあまり驚かなかつたのか。」

「ああ。そして二つ目の怒っていないのか？という質問にたいしてだが……。」

「俺ほあんたから怒りや憤りを感じなかつたんだがな。」

「答えは不正解だ。」

「へえ？その割には落ち着いているように見えるが？」

「そりゃあそうだろう。最年長がそう簡単に感情を振りまいたら下の奴までパニックになっちまうからな。」

「なるほどな、そーいやお前かなりの年寄りだったもんな。で？まだ他に理由があるんだろ？」

何？まだなんかあるのか？

「そこまで分かったのか。そうだな、さっきの理由は普段使う言い訳用だ。本当の理由は俺が怒って怒気や殺気を出すと気絶したりショック死する奴が出てくるからだ。多分耐えられる奴は女王や白夜又ぐらいの実力がないと無理だな。」

「へえ！だから隠すのか！でも完全に隠すのは流石に無理だと思うぜ？」

「そこは俺の能力で隠しているから大丈夫だ。」

「また今度お前の能力についてもおしえろよ？」

「分かったよ。そんじゃあ本拠に歩くか。」

「そうだな。おい、そこで突っ立ってねえで行くぞ！」

え？ってあ！？本当に行きやがった。

「お二人共お待ちくださいーい！」

「俺らも行くぞ！」

「」「おお！」「」

シンタロー視点

この建物懐かしいな。だが何故本拠と別館だけが綺麗に残っているんだ？他の建物はほぼ壊滅状態だったのに。わざと？子供達の住むところとして残した？なら何故大人は連れていかれた？ダメだ、情報が足りなさすぎる。また黒ウサギから話を聞かないとな。でも今は……

「おかえり黒ウサギ！」

「新しい人達ってどんな人？」

「カツコイイの？カワイイの？」

「YES！とても強くてカッコイイ人やカワイイ人ばかりでございますよ！それでは皆さん自己紹介をしますので一列にお並び下さい。」

こつちが優先だな。しかし本当に子供が多いな。これでまだ六分の一ぐらいしかいないんだろ？マリーとかは大丈夫か？

チ

「うわー。子供が沢山だ、カワイイ！」キラキラ

……大丈夫そうだな。しかしあいつらは俺がいなくなつてからどれだけ子供増やしてんだよ。俺がいた時はここまで多くなかつたぞ。

「それではこちら側から逆廻十六夜さん、久遠飛鳥さん、春日部耀さん、木戸つぼみさん、瀬戸幸助さん、鹿野修也さん、小桜茉莉さん、如月桃さん、榎本貴音さん、如月伸太郎さん、雨宮響也さん、九ノ瀬遙さん、朝比奈日和さん、館山文乃さん、小桜薊さんです。皆も知っている通り、コミュニティを支えるのは力のあるギフトプレイヤー達です。ギフトゲームに参加出来ない者達はギフトプレイヤーの私生活を支え、励まし、時に彼らの為に身を粉にして尽くさねばなりません。」

「あら、別にそんなの必要ないわよ？もつとフランクにしてくれても」
「駄目です。それでは組織が成り立ちません。」

この話になると黒ウサギは真剣な顔になるんだな。まあ、確かに大切だもんな。

「コミュニティはプレイヤー達がギフトゲームに参加し、彼らのもたらす恩恵で初めて生活が成り立つのでございます。これは箱庭の世界で生きていく以上、避ける事が出来ない掟。子供のうちから甘やかせばこの子達の将来の為になりません。」

黒ウサギの言う通りだな。

「……そう。」

「ここにいるのは子供達の年長組です。ゲームには出られないものの、見ての通り獣のギフトを持っていてる子もおりますから、何か用事を言い付ける時はこの子供達を使ってくださいな。みんなも、それでい

「いんですね？」

「「「よろしくお願いします!!」」」」

うおう!?!さ、流石は子供だな、声がでかい。耳がキーンとなったな。マリーがビビって俺の後ろに隠れたし。あ、セトが落ち込んでる、なんでだ? ヒヨリとアヤノは何でそんな悔しそうな顔をしてるんだ?

「ハハ、元気がいいじゃねえか。」

「そ、そうね。」

ていうか笑ってるのは十六夜と俺とアザミ、後はセトと遙先輩ぐらいで後は皆まともに笑えてないな。マリーにいたっては隠れたし。まあ、人それぞれか。

「さて、自己紹介も終わりましたし! それでは水樹を植えましょう! 黒ウサギが台座に根を張らせるので、十六夜さんのギフトカードから出してくれますか?」

「あいよ。」

やっぱり長い間使ってないと悪くなってるな。所々がひび割れしてるし砂も要所に溜まってるし。まあしょうがないっちゃしょうがないんだけどな。

「大きい貯水池だね。ちよつとした湖ぐらいあるよ。」

『そやな。門を通ってからあつちこつちに水路があつたけど、もしあれに全部水が通っていたら壮观やろなあ。けど使ってたのは随分前の事なんちゃうか? どうなんやうさ耳の姉ちゃん。』

「はいな、最後に使ったのは三年前ですよ三毛猫さん。元々は龍の瞳を水珠に加工したギフトが貯水池の台座に設置してあったのですが、それも魔王に取り上げられてしまいました。」

龍の瞳は確かあいつに貰ったんだけつな。懐かしいな、元気にしてるかなあいつ。

「龍の瞳? 何それカッコいい超欲しい。どこに行けば手に入る?」

「さて何処でしょう。知っていても十六夜さんには教えません。」

「ちえっ、つれねーな。ならシンタローは知ってるか?」

「知ってるが今のお前じやまだ勝てないからやめとけ。相手は箱庭最強種の一つの『龍種』だ。」

「そんな事聞いて俺が我慢するだけでも?」

「最低でも白夜叉と互角に戦えるようにならないと無理だな。だからそれぐらいになったら龍種がいる所に連れて行ってやるからそれまで待て。」

「白夜叉と互角にまでならないと一人で龍種と戦って勝つのは無理なことか。面白れえ! いいぜ、やってやろうじゃあねえか!」

十六夜のテンションがやばいな。あつちはジンたと水を運ぶ方法とか聞いているし、それを聞いて飛鳥がちよつとガツカリしてるし。皆楽しそうだな。コミュニティがこんな惨状なのに皆生き生きとしてる。それはギフトプレイヤーが来たからなのか、子供だからなのかは知らないがそれでも暗いよりはマシだな。

「それでは苗の紐を解いて根を張ります! 十六夜さんは屋敷への水門を開けてください!」

「あいよ。」

「十六夜、濡れるかもしれないから気をつけろよ。」

「マジかよ。今日はもう濡れたくねえよ。」

「だから気をつけろと言ったんだ。」

「そうだな。分かった、気を付けるぜ。」

おお! あの水樹、予想以上に水を出すな。どんだけ元気な水樹なんだよ。

「うわお! この子は想像以上に元気です♪」

「凄い! これなら生活以外にも水を使えるかも……!」

「なんだ、農作業でもするのか?」

「近いです。例えば水仙卵華などの水面に自生する花のギフトを繁殖させればギフトゲームに参加せずともコミュニティの収入になります。これならみんなにも出来るし……」

「ふうん? で水仙卵華ってなんだ御チビ。」

十六夜の奴、御チビってなんだよ。ジンだってビックリしてんじやねえか。

「す、水仙卵華は別名・アクアフランと呼ばれ、浄水効能のある亜麻色の花の事です。薬湯に使われる事もあり、鑑賞用にも取引されています。」

ましたけど。」

「まあ、そこら辺はしょうがないな。俺の部屋が残っているって事はあいつの物も残っているのか?」

「はい。というかシントアローさんの部屋にある者は一切触れてませんよ。勝手に触つていい思い出がないので。」

「ああ、お前はよく弄られてたからな。俺が作った薬を飲まされたりしてたもんな。」

「はい。ああ、あの時の光景は今でも目に浮かびます。」

「ヤハハハハ。何があつたんだ、シントアロー?」

「それは」

「言つちやダメですよシントアローさん!」

「だつてよ。」

「ちえつ、後でこつそり教えてくれよ?」

「だから駄目ですつて!」

「分かった。」

「シントアローさんも了解しないでください!」

「それで黒ウサギ、私達は何処に泊まればいいのかしら?」

「ああ、すいません。コミュニティの伝統では、ギフトゲームに参加出来る者には序列を与え、上位から最上階に住む事になっております……けど今は好きな所を使つていただいて結構ですよ。移動も不便でしようし。」

へえ、シントアローは何階に住んでいたんだろうな。かなり強いらしいから上のほうだとは思うんだが。

「シントアローは何階に住んでいるんだ?」

「やっぱり十六夜も気になったか。」

「シントアローさんは最上階でございます。」

!?マジか!という事はシントアローは東区画最強のコミュニティの中でもトップクラスっていうことか!す、すごいな。

「へえ!やっぱりお前とは1回戦つてみたいな。」

「コミュニティの事が一段落ついてからなら別にいいぞ。」

「ヤハハハハハ!楽しみだ!」

「黒ウサギ、そこにある別館は使ってもいいの？」

「ああ、あれは子供達の館ですよ。本来は別の用途があるのですが、警備の問題で皆此処に住んでます。飛鳥さんが百二十人の子供と一緒に館でよければ」

「遠慮するわ。」

百二十人の子供と住むのはよほどの子供好きじゃないとキツイな。けど今はなにより風呂に入りたいな。

「なあ、黒ウサギ。俺達風呂に入りたいんだが……」

「はい。湯殿を見えますね。」

そーいや風呂って使われてたのか？あ、真っ青な黒ウサギが帰ってきた。

「一刻ほどお待ちください！すぐに綺麗にいたしますから！」

やっぱり使われてなかったから凄いな事になってたんだろな。

『お嬢………ワシも風呂に入らなアカンか？』

「駄目だよ。ちゃんと三毛猫もお風呂に入らないと。」

「そつすよ、三毛猫さん。じゃないと汚くなっちゃうツスよ。」

「ふうん？オマエらは本当に猫の言葉が分かるんだな。」

「うん。」

「俺の場合は言葉というより思考ですけどね。」

「オイワレ、緑のあんちゃんはともかくお嬢をオマエ呼ばわりとはどういうことや！調子乗るとオマエの寝床を毛玉だらけにするぞコラ！」

「駄目だよ、そんな事いうの。」

「てか俺をオマエって呼ぶのはいいんスね。」

「出すぎた事を聞くけど………春日部さんに友達ができなかったのはもしかして」

「友達は沢山いたよ。ただ人間じゃなかっただけ。」

耀の奴、ちよつと不機嫌になったな。

「ゆ、湯殿の用意ができました！女性様方からどうぞ！」

「ありがと。それじゃあ先に入らせてもらおうわ。」

「マリー達も行くぞ。」

「ねえ、シンタローさん。一緒に入らない？」

「な!?何を言っているんだヒヨリ！」

「断る。お前が良くても他が駄目だろ。」

「それじゃあ二人きりならいいの？」

「それも駄目だ。お前も女の子なんだからそういう事言わないの。」

「ちえっ、つれないわね。」

「はあ、いいから行くぞヒヨリ。」

「わかりました。それじゃあ失礼します。」

一体何を言い出すんだヒヨリは。シンタローの事が好きなのは知ってるがまさかこんな事をいうなんて。仕方ない、風呂に入っさっぱりするか。

8話

第8話

シンタロー視点

「ふう、やっと行つたか。全くヒヨリの奴何言つてんだか。」

「ヤハハハ、いいじゃねえか。好きな人と一緒に風呂に入りたいって言うくらいよ。まああそこで領いてたらロリコンって言つて蔑むだけだけどな。」

「俺にその気はねえよ。それに俺は既に恋人がいるからな。」

「それつてあの赤いマフラーしてる奴のことか？」

「ちげえよ。」

「え!?シンタローくん彼女いたの!?!」

「本当ツスカ、シンタローさん!?!」

「そういやシンタローくんまだ学校に行つてた時そんな感じの事言つてたね。」

「よく覚えてましたね遙先輩。」

「へーシンタローさん彼女いたんだ。意外だね。」

「まあ長い時間生きてきたからな。ほらそれより中に戻るぞ。早く部屋決めて荷物置いてこい。」

「二はーい(ツス)二三」

「先戻つてていいぞ。俺はもうちよい夜風を浴びてるわ。」

「分かった。じゃあ十六夜頼むな。」

「おう。任せとけ。」

これでこれから来る奴らは大丈夫だろう。それじゃあ懐かしい部屋に戻るかな。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

ガチャ

「おー、懐かしいな。俺が出た時と全く変わってないな。やつぱ埃たまってんなー。少し掃除するか」

「ふう。大体こんなもんかな。大分すつきりしたな。」

ドーン！

「おつ十六夜の奴始めたか。果たしてどうなるかは十六夜次第だな。まああいつなら大丈夫だろ。」

コンコン

「おう、開いてるぞー。」

「失礼しまーす。シンタローさんお風呂空きましたよー。」

「分かった今行く。」

久しぶりのコミュニティの風呂だ。まあ堪能させてもらうかな。

◆◆◆◆◆

ふういい湯だったな。明日は帰ってきたから一応女王や牛魔王達に挨拶しに行くか。黒うさぎに言っとかないと。

まあ今日は色々あつたしもう寝るか。

◆◆◆◆◆

「あーよく寝たな。そういや昨日は十六夜達どうなったんだろうな。まあいいや。今日はいつらの初めてのギフトゲームか。まあ聞いた感じだとそこまで強い奴じゃないしいぎとなつたらアザミもいるから大丈夫だろう。そんじゃあ黒うさぎに言つてあいつらに会いに行くか。」

しかし黒うさぎ達はどこにいるんだ？あ、いた。

「おーい、黒うさぎー。」

「あつシンタローさん何か御用でしょうか？」

「これから昔の知り合いに顔見せに行つてくる。」

「分かりました。」

「帰りは多分夜になるからあいつらの事よろしくな。一応アザミがいるとはいえ心配だからな。」

「はいーこの黒うさぎにお任せ下さいー！」

「おう、それじゃあ行つてくるわー。」

「はい、行ってらっしゃいませ。」

「なんかあつたら連絡しろよー。」

「はい。」

よし。そんじやあ行くか。

◆◆◆◆◆

キド視点

俺たちは今昔の知人に会うと言ってどっかに行ったシンタロー以外のコミュニティのメンバーでガルドⅡガスパーとギフトゲームをするために舞台区画まで行く途中だった、のだが……

「あつー！昨日のお客さん達じゃないですか！これからギフトゲームですか？」

「あ、ああ。」

「頑張ってくださいよ！アイツのせいでウチの店の売上げがどれだけおちたのやら……」

そ、そうか。これは昨日迷惑かけてしまったこともあるし絶対に勝たないとな。

「所で皆さん知ってますか？今回のゲーム、何故か舞台区画じゃなくて居住区画でするらしいですよ？」

「なんですと？それは本当でございますか？」

「はい。しかも自分のコミュニティのメンバーなどを全員そこから追い出しているらしいですよ。今日来たお客さんの1人が見たと言っていました。」

ふむ。わざわざ戦力を減らしてまで何故居住区画でやる必要があるんだ？何か意味があるのかそれともただ自棄になっているのか……うん、分からないな。こういうのは基本シンタローの仕事だったからな。く、何故今日にしたんだシンタロー。今何処で何をしてるんだよ。

その頃のシンタロー

「ほら、シンタローもつと飲めつて！」

「お、おいやめろよ孫！飲むから！ちゃんと飲むから落ち着け！」

「ははははははは！」

「だからやめろって！」

キド視点

「……なんかシンタローの叫び声みたいなのが聞こえた気がしたが、幻聴だろ。」

「キドさーんもうそろそろ着きますよー」

「ああ。分かった」

さて俺達の力がこの世界でどれ位通用するか試してみるか

……

……

……

・

「なあ黒ウサギ。本当にここが居住区画なのか？俺にはジャングルにしか見えないんだが」

「居住区画の筈ですよ？」

「やっぱり虎だからじゃないのー？」

「いえいえ前に1度見た時は普通の居住区でしたよ？一体何があつたのでしょうか？」

「これは……鬼化してる？……やっぱり彼女が……？」

？ジンは何をぶつぶつ呟いているんだ？

「ジン君達ー、こっちにギアスロールがあるわよー」

「分かった今行く」

さて一体どんなギフトゲームに何だろうな

『ギフトゲーム名 “ハンティング”』

プレイヤー名： 久遠 飛鳥

春日部 耀

ジンⅡラッセ

ル

木戸 蕾

鹿野 修哉

瀬戸 幸助

小桜 茉梨
如月 桃
榎本 貴音

雨宮 響也
九ノ瀬 遥
朝日奈 ヒヨ

楯山 文乃
小桜 薊

リ

・クリア条件

ホストの本拠内に潜むガルドⅡガスパーの討伐

・クリア方法

ホスト側が指定した特定の武具でのみ討伐可能。指定武具以外は
“契約”によってガルドⅡガスパーを傷つける事は不可能。

・敗北条件

降参か、プレイヤーが上記の勝利条件を満たせなくなった場合。

・指定武具

ゲームテリトリーにて配置。

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗の下、“ノーネーム”はギフト
トゲームに参加します。

『フォレス・ガロ』印』

「ガルドの身を条件に……指定武具で打倒!？」

「こ、これはまずいです!」

「何がまずいんだ?」

「このゲームってそんなに危険なの?」

「いえ、ゲーム自体は単純です。問題はこのルールです。このルール
では飛鳥さんのギフトで彼を操る事も、耀さんのギフトで傷つける事
も、出来ないですし恐らくはマリーさんのギフトで止める事も出来な
い事になります……!」

「……どういう事だ?」

「『恩恵』《ギフト》ではなく『契約』《ギアス》によってその身を守っているからです。これでは神格どころか薊さんの能力でも手を出せません！彼は自分の命をゲームに組み込む事によって皆さんの力を克服したのです！」

な、なんだと!?!それじゃ俺達の能力は完全に通じないと言う事か!?!

「そう? 案外楽だと思うのは私だけなの?」

は?!

「え?」

「な、何を言っているんですか貴音さん!?!皆さんのギフトが通じないんですよ!?!」

「僕も貴音に賛成かなー」

「遙さんまで!?!」

そうだぞー何を言っているんだこの二人は!

「だって通じないのはガルドに直接干渉するのだけで僕や貴音、キドみたいに自分に干渉するギフトは使えるでしょ?」

あ

「「「「「「あ」「」「」「」」」」」」

「何? 気付いてなかったの?」

「ヤハハハハハハ!」

「まあそう言ってやるな。まだ経験が浅いものばかりだしお主達は初めてのギフトゲームだからな。大目に見てやれ。」

「薊さん、貴音が言いたいの皆やジン君に対してじゃなくて一番経験が豊富である筈の黒ウサギに対してだと思おうよ。」

「うっ!... ..すみませんでした。」

「いや、まあいいのよ。それじゃあ今回はシンタローがいないから私達で作戦を決めるわよー。薊さんは私達が本当に危なくなったら介入するって事でいいわよね?」

「ああ。兄さんにもそう言われてるしな。まあ今回くらいなら大丈夫だと思いが怪我しないように気を付けるんだぞ。四肢欠損の様な怪我じゃなかったら治せるからな。」

「分かった。」

作戦かー。最近はずっとシンタローに任せっぱなしにしてしまってたからなー。これからはシンタローがいない時だってあるからな。自分達でしっかり考えるようにしないとな。

.....

.....

.....

「よし大体きまつたな。それじゃあもう一度確認するぞ。まず搜索はヒビヤの『凝らす』を使って探すぞ。ヒビヤ大丈夫だな?」

「うん。箱庭に来てから能力が強くなったからか持ち主を見なくても見たいものが見れるようになったから大丈夫だよ。」

「へーヒビヤ君そんな事できるようになったんだ。」

「覗いちゃダメだよーヒビヤ君。」

「猫目のおじさんじゃないんだからそんな事しないよ。」

「僕もしないよ!?!」

「いいから次行くぞ。それで次はガルドと戦う時だがもしそれまでに指定武具が見つかってなかったらコノハと耀で抑えてくれ。」

「了解」

「うん、分かった。」

「見つかったいたらエネに持たせて置いて二人には陽動をしてもらう。隙が出来たらエネがトドメを刺してくれ。」

「了解よ。ギフトの『電子生命体』が私の予想通りのものだったら大丈夫よ。」

「そうか。残りは俺の能力の『隠す』で隠れるからな。」

「まあ単純だけど堅実な作戦だな。」

「当たり前だ。誰も進んで怪我したいか思ったりはしないからな。よし、それじゃあ行くぞー!」

「「「「「おうー!」」」」」」

その頃のシンタロー

「ほらシンタローもつと飲めつて!」

第9話

第9話

十六夜視点

「皆さん大丈夫でしょうか？」

「大丈夫だろ。薊もいるんだしよ。」

「た、確かに薊さんが居れば大抵のことは大丈夫ですけど今回はキドさんたちもいらつしやいますし……」

「まあ確かにヒビヤやヒヨリみたいに小学生もいるからな心配になるのは分かるが大丈夫だろ。」

「何故でしょうか？」

「だってあいつらカゲロウデイズとかいう世界をクリアしたんだろ？で、そのカゲロウデイズっていうのはこのギフトゲームより簡単なものなのか？」

「いえ、カゲロウデイズの難しさはこんなゲームの比ではありません。一歩間違えたら白夜叉様でも抜け出せなくなる可能性があります。」

「なら大丈夫だ。あの白夜叉でも下手したら抜け出せないゲームをあいつらはクリアしたんだ、今回もクリア出来るだろ。それにお嬢様と春日部もいる事だしな。そんなに心配なら主神様にでも祈っとけ。」

「……そうですね！私もここで帝釈天様に皆さんが無事にクリア出来るようにお祈りします！」

「おう、そうしとけ。」

しかし気になるのはヒヨリのギフトだな。昨日カノやセトに聞いた話から敵であったクロハとかいう奴は「目が冴える」が擬人化したようなものだと考えた。そして今朝薊に聞いたところ本人もちゃんと知っているわけじゃなかった。冴える蛇は特別で能力の筈なのに意識が存在していたためだと言っていた。一応能力の推測はしていたらしく恐らく「能力者の願いを叶える」という能力じゃないか、と言っていたが本当にそうなのか？そして今はヒヨリのギフトになっている。そして擬人化出来る。もしかしたら……まあなんかあればシンタローに言えばいいだろ。アイツなら願いを叶える能力で

「能力を発動してセトとアヤノちゃんと隠れててセトが判別したら私達に教えて。」

「分かった。俺の能力もギフトになったからか箱庭に来たからか分からないが強化されているからな。今ならサーモグラフィにも映らないだろう。それに一度触れたぐらいじゃあ消えないだろう。」

「俺の能力も強化されてるっスね。前は目を合わせないと読めなかったっすけど今なら俺の視界内なら思考は読めるッス。後は少しだけ思考に干渉出来るようになったっスね。」

思考に干渉だと？強すぎないかそれ？

「へー、凄いな幸助！それってどんな感じに干渉出来るの？」

「なんと言うか相手の思考を違うものにすり替えるって言えばいいんすかね？例えばAの事について考えていたとするっス。その人がAについて色々考えている所に干渉するとAではなくBについてを無意識に考えるようになるって感じっスかね。」

「それって謎解きの対決の時に凄く使えないか？」

「まあそうっすけど完全に違う事とかに変える事は出来ないので微妙っスね。」

それでもかなり使えると思うんだが……

「それじゃあ行くわよ。っとその前に私もギフト発動しとかなないと。遥もしときなさいよ。扉開けたらすぐ戦闘なんて事もあるかもしれないからね。」

「そうだね。僕達だけじゃなくてキド達もだよ？」

「ああ、了解した。」

「了解っス！」

「分かりました！」

「それじゃあ発動するわね？ギフト“電子生命体”発動。」

「僕も発動するよ。ギフト“人造人間”発動。」

「うおっ！」

なんだ!?!急にエネとコノハか光出したぞ!

だんだん光が収まってきたな。やつと見えてきた。二人はどうなったんだ？そこにいたのは……つてええ!?!

「どうです団長さん驚きましたか？」

「・・・ネギま・・・食べたい。」

「お、おお前らその姿は」

「た、貴音先輩と遥先輩？」

「これが私のギフト “電子生命体” と遥のギフト “人造人間” の効果ですよ団長さん！つまりコノハとエネの姿になるんですよ！しかもコノハは “目が醒める” を使っていた時と同等の筋力や体力、速度を手に入れたり傷付いたらすぐに回復できるようになってるんですよ。私の場合は実体化するですけど足が無いせいとか空を自由に飛ぶことが出来るんです。さらに物理攻撃が聞かないようにもなってるですよ。あ、機械があれば入る事も出来ますよ。まあ制限時間があって連続3時間が限度ですけどね。しかも一回使ったら使った時間と同じ時間使えなくなるのでそう簡単には使えないんですよ。後は物理じゃなければ効くのでその所も注意ですね。まあ今回は大丈夫だと思えますけど。」

「いやそれでもかなりのチートだぞ？相手が物理攻撃しかなかったらダメージが全く通らないって事だろ？」

「後は私からの物理攻撃も通らないので早く攻撃手段が欲しいって感じですかね。」

「なるほどな。まあそこら辺はホームに帰ってからシンタローに頼むかしたりすればいいんじゃないか？」

あいつなら何か丁度いいものを持ってそうだな。いつその事皆の分も頼んでみるか？

「そうですね。ご主人なら銃とか持ってそうですね。それじゃあ早く聞く為に急ぎませうか。」

「そうだね。シンタローなら絶対何か持ってるよ！」

「コノハ、よろしくね。」

「分かった。・・・それじゃあ行くよ？」

「いいですよー。」

「了解だ」

「オツケースよー。」

「準備万端ですよ！」

さあ合図だクールに行こう。



第三者視点

コノハが扉を開け中を見て最初に見たのは大きく真っ白な毛並みをした虎だった。

「ゴガアアアアアアアアア!!」

「……!!」

「コノハ！」

「大丈夫。エネは先に剣を。」

「分かった！」

「キドとセトとアヤノちゃんも気を付けて！」

「分かって（る／るっス／ます）！」

「目を盗む！」

（ここは俺の城だ！俺が王だ！テメエら程度に奪われてたまるか！殺す！殺して貪り食ってやる！）

（この感情に思考は……ということは！）

「コノハさん！エネさん！この虎、ガルドっス！気を付けて下さい！」

「分かりました！ありがとうございますっツナギさん！」

「分かった。……エネ、なるべく早くね。」

「了解です！アヤノちゃんは今の内に下の皆に連絡して下さい！」

「は、はい！分かりました！」

アヤノが1階にいる皆に連絡している間に戦闘は過激化していった。

ガルドはその巨大な体で襲いかかる。前脚で押し潰そうとした尻尾で薙ぎ払おうとする。ガルドが暴れるたびに周りに置いてあった絵画や像などの装飾品が飛んでくる。しかしエネはギフトの効果で空を飛んでいる為高さが足りずに当たらず、コノハはその身体能力や動体視力、そして昔やっていたシューティングゲームの経験からか綺麗に躲し捌ききっていた。

（右、右、左、下、右、左……跳ぶとエネみたいに動く事が出

「はあ、はあ」

「マ、マリーちゃん大丈夫？」

「いるよ。」

「……うん。」

「はい。」

「いますよー。」

「うむ。」

「ええ。いるわ。」

「以下同文。」

「OKです。それじゃあどうやってガルドを倒すか作戦を考えましょうー。」

「それより一つ質問いいかしら？」

「はい！何でしょう？」

「貴女とそこに立っている不思議な格好をした方はどなたでしょうか？」

「ああその事ですね？では自己紹介しましょう。私はスーパーコンピューリテイガールのエネちゃんです☆」

「……僕は……コノハ……よろしく。」

「え、え？で、電腦？」

案の定パニックになってますねー。

「……？遙さんと貴音さん？」

「おお。正解ですよ耀さん！よく分かりましたね！」

「匂いが一緒だったから。」

流石犬の嗅覚を持つてるだけありますね。

「え！遙さんと貴音さんなの!？」

「そうですね。この姿はギフト『電子生命体』を使っている時の姿ですよ。ちなみにコノハは『人造人間』を使っています。」

「そ、そうなのね。喋り方が全然違ったので気づかなかったわ。」

「この姿だとかの喋り方が染みついているんですよ。まあそんな事は置いといて作戦会議しましょう。誰か案がある人はいますか？」
「あるよ。」

そしてコノハは背を向けて逃げていく。

(まちやがれええええええええええ！)

「ゴガアアアアアアアアアアア!!」

既に考える事もせず、一心不乱にコノハを追いかけて行く。木や草がなく一直線の道を走っている事に疑問も抱かずに。そして、

『木や草達よ！その身を使ってガルドの動きを止めなさい！』

その命令によって周りにあつた木や足元にある草が一斉にガルドに絡みついていく。

「グガアアアアア!?!」

「耀さん！遥さん！今よ！」

「うん。」「分かった。」

そして上から自分の体重を象に変えた耀と拳を握ったコノハが降ってくる。

「えいー!」「はあー!」

二人の攻撃の衝撃によりガルドは地面に叩きつけられた。そこに白銀の十字剣を持った飛鳥が走ってきて、

「あなた、その姿の方が素敵よ。」

眉間に突き刺した。